

雅俗相成書 三

和意のふと書の國
英獨歐南の英國
今并減大中の病
海の色と道と舞の本
大山と日本
大山と和丸
紅葉茶の池

特別
14
1919
167



〇人あるを其教のマンニングを年々病後と
 わして事を往く偶外来其為の時を充満し
 彼人の診察を往つて其時一婦人の死す中
 の事である其顔も其らに洗面をんくして
 其る病を治つてあるものなりし、マンニング也
 然るも其自ら一客の病を回し憐れむし其
 乳癌を患つてあるものなりし物を其
 を治すものなりし果しとれし其日客マンニ
 ンの初病を往く彼人得其意の外科術を以

志めんことを祈する也。病後に入る。莫ん
そのも二同一の意の出るのみと。書出のいこと
ま石洞の精神治療を言ふ施する人。言
貴るる茶價をゆして送る其の志を殺す
の意を自ら其意を異らすと云ふべし
○今井とある山の妻を聴く事終る大なる病
攻る入る事。大なるの或る事送る河也助午を
患者の利益治す事と云ふを知らぬを以て後
この茶價を投じて。自家試治の
下牛犠牲の供す。この後茶を名を
戦ひ五體を其の言を聞き。言を以て

東林堂

死を早めざるの事。又死行の重志
を併せし。苦悶の相は彼れを鬼轉の入り
志ある事。死後彼の五體を捨てる人の福を
する事。茶は皮雷の志。ある事。背後
紫斑を印する事。此の故を言ふ事。破案
るは。わらふめを言ふ事。此の事。其個言。錢
をえりて人を殺す事。その可也
○増子の茶。年久し。ヤその物
事。もつとめ。実験上。一種の人。お法を
自得する事。語を聞く事。回く。その事
の入り。その事。先か。事。其の事。

へて其の自慙を諱視し其のその方の如く
を判り年を修めたるは漸やく其の術に
長し今と云うても自ら修めたるは其の学
生の事試法と教を自照する事大星
を覚えて修めたる事、但し其のおも
判りんと云うても其のその方の入る試法の
上を母縁しめたる事、如くは漢の基
と云ふは、檢りて其の心すの業たる事、其
す、脱力のさくんたる事、その眼、其の事
と何とも云ひあひの事、其の事、其の事
んを

増子と云ふの年を訓誨し其の効ありたる
事の秘訣を語つて曰く、人を自分の之風
にまゝとせん事、確に其の年を訓誨
して其の効ありたる事、其の年の修めたる
寝るに、入るとき、静かに訓誨せし
かゝる事、最も効あり、蓋し白晝に既服
の正せる法、動しつゝある事、其の例に
従ふ事、我を思ふ時、之にと及ぶ事、其
を、其の由り、彼の人の既服を改む事、其
彼の人の容あり、訓誨を定めて、能く其
之を修めたる事、其の既服中の思ふ事、

言駢を微する尤き事と云はれ我は自らいふ
其の言正と其の忠と又五拍と生し
と拾ふ奉を親と云ふ其の奉を拾
そのゆゑ曲邪と變化を珍肥と變化を生しを
うまひたる事と云ふ面和の事と云ふ一様優りたる
する面相と云ふ事と云ふ高類思ふを起ぬる
りありたる歎地事の事と云ふ念うる事と云ふ
事との謂はる接の關係ありと拾ふ事との謂はる似
たる又改事此の謂はるぬきり通の關係あり
するは事の筋のことと云 織巧なることと云ふ
其の働きを示すと云ふ事と云ふ其の理と云ふ事

東條貞榮

〇其の理と云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
其の働きを示すと云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
〇其の理と云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
其の働きを示すと云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
〇其の理と云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
其の働きを示すと云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
〇其の理と云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
其の働きを示すと云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
〇其の理と云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
其の働きを示すと云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
〇其の理と云ふ事と云ふ其の理と云ふ事
其の働きを示すと云ふ事と云ふ其の理と云ふ事

〇群亦辭起る舞の本と云ふ群類と云ふ事
二十拍の事と云ふ揚げの事と云ふ事

セーリスのやう天才を失う事を同じに現在が
、伊内、此の毒のちり乾く更なる語らる。地
のちを破る。以て此の前のころはおもひを果
してそれこそ前にもあつた。地代が潮
、古のころのやうな事を言つて、こゝろ
、今作能と信を田舎に來たをさ
けぬと直るゝ來たといふとあつた。其の
泥筆、うあつた。おおもひがさるゝを
即ち年代を推して此の一大治講の動
、再考の、

東林堂製

地代の治講を衰へ、その地の、
論年代を考へ、いふ、いふ、いふ、
、

○西洋の地誌を考へ、其の事、
を説く、と、火山の傳や火山の
く出て、その、其の、西、
伊、伊、伊、伊、伊、伊、伊、
、
、
、

岩と云ふのは行の塊^塊を熔解體或も小塊解
体と云ふも地層の出現しに岩を云ふ
のありて其の出現の仕方其しくし^{堆積}
し^{堆積}火山と云ふのあり又地質学者の
此の火成岩と云ふ花崗岩と火山岩の二種あり
こと云ふべき

火山の地層を火山の地層と云ふは証を以て
いふ火成岩の全圖を云ふべき火山
岩と云ふは、火山の地層と云ふは火山
と云ふべきは、火山の地層と云ふは火山
風景のあり、火山の風景の地層と云ふは
火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは



と特異な火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは
火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは
火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは

火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは
火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは
火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは

火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは
火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは
火山の地層と云ふは火山の地層と云ふは

豪爽雄拔くも風格を有邁歟完く夫の奇嶽の
形の中にも四民氣風の標型を以つて擬するも其の
形の孤峭雄健くも其の氣格の豪邁歟完くも
依るも勿論くも此の山を以てするも其の
のみを以てするも此の山を以てするも其の
火山の特徴くも其の山を以てするも其の
ありて其の各峰を以てするも其の
の多きを以てするも其の
變りありて其の火山の特徴を聽けよ

- 一 山岳のおまきこと
- 二 山岳の内錐體を以てすること



- 三 噴火口を具すること
 - 四 裾野を以てすること
 - 五 渓谷の山頂くも脚林帯を以てし其の
の如きを以てすること
 - 六 氷凍の裾野くも完然噴出すること
以上六徴と稱し其の標本を以て教ふるも其の
六徴の一者くも二三を以てするも其の
以てするも其の
- 火山の特徴を以てするも其の
まも怪しむも其の
山岳の奇嶽は其の火山の山頂の如く其の

し七邦人之れをさふをわつて、見可真、火山をみし
るるる支那の名山も過る、
石石しるる、之れを昔も焼く言ふを
まそわく、何なる心むか

一日、火山と云はれ、猛烈を眺てし、懐か思怖の念
をわすと、さし、その能くも、清く、
あゝ、例へば、阿蘇、
一見、懐か、
く、
るる、
渡嶋の、

東林堂

取れ、火山の、

若し、
とを、
電の、
并、
と、
山、
を、
火、
中、
の、

こ一景、誰れう海面と接く幾千尺以上の山頂の湖
ありと思へん、火山を知らざる四洲を先づ入動せず
んは、異てして此の事、夫を定むんとす、
其の事、
其の事、
○此の事、

火山の作りを依りて奇景を得く、其の事、
山、
其の事、
其の事、
其の事、
其の事、
其の事、

東橋製

の噴、
—
其の事、
其の事、

尚ほ火山、
其の事、
其の事、
其の事、
其の事、
其の事、
其の事、
其の事、
其の事、

を承りしる物種は古来名山の亭や寺異の山ありて
誇りたる[○]四五の風骨風骨ありて言ふ此の二種
の火山の岩の現象なる外を[○]即ち耶馬河
明義の跡を[○]始めとし也年あるは[○]遠く[○]と称
る[○]疑火[○]久しく[○]雨の[○]侵蝕[○]依り[○]自ら[○]
彼入り[○]ぬき[○]奇なる[○]山容[○]と[○]石つ[○]を[○]なり[○]なる[○]
外[○]と[○]又[○]古[○]事[○]あり[○]依[○]の[○]母[○]事[○]と[○]怪[○]す[○]
此馬豊田[○]此の[○]玄[○]武[○]洞[○]、[○]林[○]野[○]果[○]の[○]文[○]妙[○]と[○]も
此[○]の[○]材[○]木[○]早[○]野[○]砂[○]河[○]並[○]流[○]即[○]由[○]代[○]の[○]七[○]釜
此[○]前[○]花[○]野[○]の[○]大[○]門[○]も[○]大[○]津[○]郡[○]の[○]徳[○]嶋[○]の[○]こと[○]き

東棟原製

或千萬條の[○]石[○]柱[○]の[○]直[○]立[○]し[○]或[○]と[○]横[○]斜[○]し[○]或[○]と[○]柱[○]
木[○]を[○]さ[○]す[○]べ[○]と[○]こ[○]を[○]さ[○]す[○]奇[○]觀[○]を[○]さ[○]す[○]こ[○]の[○]を[○]さ[○]す[○]
火山[○]の[○]後[○]ゆ[○]こ[○]を[○]さ[○]す[○]玄[○]武[○]岩[○]の[○]現[○]象[○]の[○]外[○]と[○]も[○]
也[○]
此[○]年[○]表[○]玄[○]武[○]岩[○]の[○]事[○]も[○]同[○]し[○]火山[○]作[○]田[○]の[○]事[○]も[○]
異[○]なる[○]現象[○]を[○]さ[○]す[○]こ[○]の[○]高[○]は[○]何[○]れ[○]も[○]或[○]も[○]記[○]載[○]
の[○]使[○]す[○]こ[○]の[○]事[○]も[○]即[○]ち[○]玄[○]武[○]山[○]の[○]脚[○]踏[○]る[○]俗[○]人[○]六
と[○]稱[○]す[○]こ[○]の[○]事[○]も[○]全[○]國[○]の[○]事[○]も[○]同[○]し[○]人[○]を[○]
此[○]の[○]神[○]秘[○]の[○]附[○]合[○]を[○]さ[○]す[○]又[○]の[○]岩[○]を[○]由[○]り[○]鐘
の[○]滴[○]下[○]す[○]こ[○]の[○]事[○]も[○]是[○]等[○]も[○]或[○]も[○]燒[○]山[○]の[○]
中[○]の[○]水[○]蒸[○]氣[○]の[○]放[○]出[○]す[○]こ[○]の[○]事[○]も[○]斜[○]面[○]の

山崎の源流を記しつゝ、その源流の地を記すに
よびの木の葉の影を記すに、此の源流の地を記すに
の人の胎を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
名の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
せしむるに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
波濤のありは、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
うらやまの源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
状を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
ちの源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
大いなる源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
ふし

東洋書院

○その源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
田の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
ころを記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
たの源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
名の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
き、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
へ記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
清き源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
まんと記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに
名を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに、此の源流の地を記すに

第一回紅葉祭順序

(明治三十六年十二月十六日彩文院第三十七回誕辰於紅葉館)

開祭—自午后一時半

- (1) 開祭の辭……………巖谷小波氏
- (2) 追慕演說……………角田竹冷氏
- (3) 同……………岡田朝太郎氏
- (1) 同……………上……………高田早苗氏
- (5) 曲謠「融」……………舞地丸觀世清廉氏
- (6) 談講「金色夜叉」(市ヶ谷御門外)……………猫遊軒伯知氏

東棗堂製

食會—自五時至六時

- (7) 歌舞「和歌三神」……………人丸とめ子
赤通姫……………きぬ子
- (8) 劇演「心の闇」……………川上氏夫妻
- 開演の辭……………藤澤淺次郎氏
- 佐の市……………兒島文衛氏
- おくめ……………柴田善太郎氏
- 千束屋の亭主……………日野健一郎氏
- 同女房……………石田信夫氏
- 佐の市の母……………

以上



明治卅六年十二月十六日
紅葉第一回紀念繪冊
（印刷部）



さかば郵便

思ふ節
を忘る
りて
ふ人
の
名
を
教
し
る
事
は
何
れ

叔父、日又おまゝの閑居をなさるるに近所の俳諧
詠や折紙、新小説の交りし、余り未だ山
人と交はさるる前のこととせむるに、

拜啓陳者 故尾崎紅葉君の文勳を永く追慕せん爲め 生等相謀
り紅葉會を組織し來十六日 水曜 同君の誕生日を期して第一
回を芝公園紅葉館に相開き追悼の意を表し度と存じ候間萬
障御繰合午後正一時半までに御貴臨有之度此段及御案内候
也頓首

會費 金貳圓 (當日御持參の事)
御來否來十日迄に紅葉館内紅葉會宛御返事の事

明治卅六年十二月四日

發 企 人

(順ハロイ)

- | | | | |
|---------------------|-----------|-----|---|
| 森 秋丸 高 岡 林 市 | 石 | 巖 | 泉 |
| 山 岡 田 田 田 島 | 橋 | 谷 | 鏡 |
| 鷗 定 田 田 朝 龜 謙 吉 | 新 賀 小 | 猪 一 | 花 |
| 外 輔 華 年 苗 三 郎 太 郎 三 | 太 郎 一 | 郎 一 | |
| 朝 幸 上 武 和 大 芳 石 | 橋 | 德 | |
| 比 田 幸 武 和 大 芳 石 | 賀 | 富 | |
| 奈 田 田 幸 武 和 大 芳 石 | 新 | 猪 | |
| 知 露 桂 ム | 太 | 一 | |
| 泉 件 敏 舟 | 郎 | 郎 | |
| 齋 後 久 坪 梶 長 德 巖 | 古 濤 郎 | 猪 一 | |
| 藤 藤 我 内 梶 長 德 巖 | 道 古 濤 郎 | 猪 一 | |
| 松 街 順 之 道 古 濤 郎 | 助 遠 古 濤 郎 | 猪 一 | |
| 洲 外 助 遠 古 濤 郎 | | | |
| 廣 江 安 角 川 小 千 泉 | | | |
| 津 見 田 上 栗 葉 鏡 | | | |
| 柳 水 善 竹 眉 風 鏡 | | | |
| 浜 陸 之 冷 山 葉 造 | | | |



吾とせむるぬめし少くを憶ひて、他念の料
とらさんと云ふ

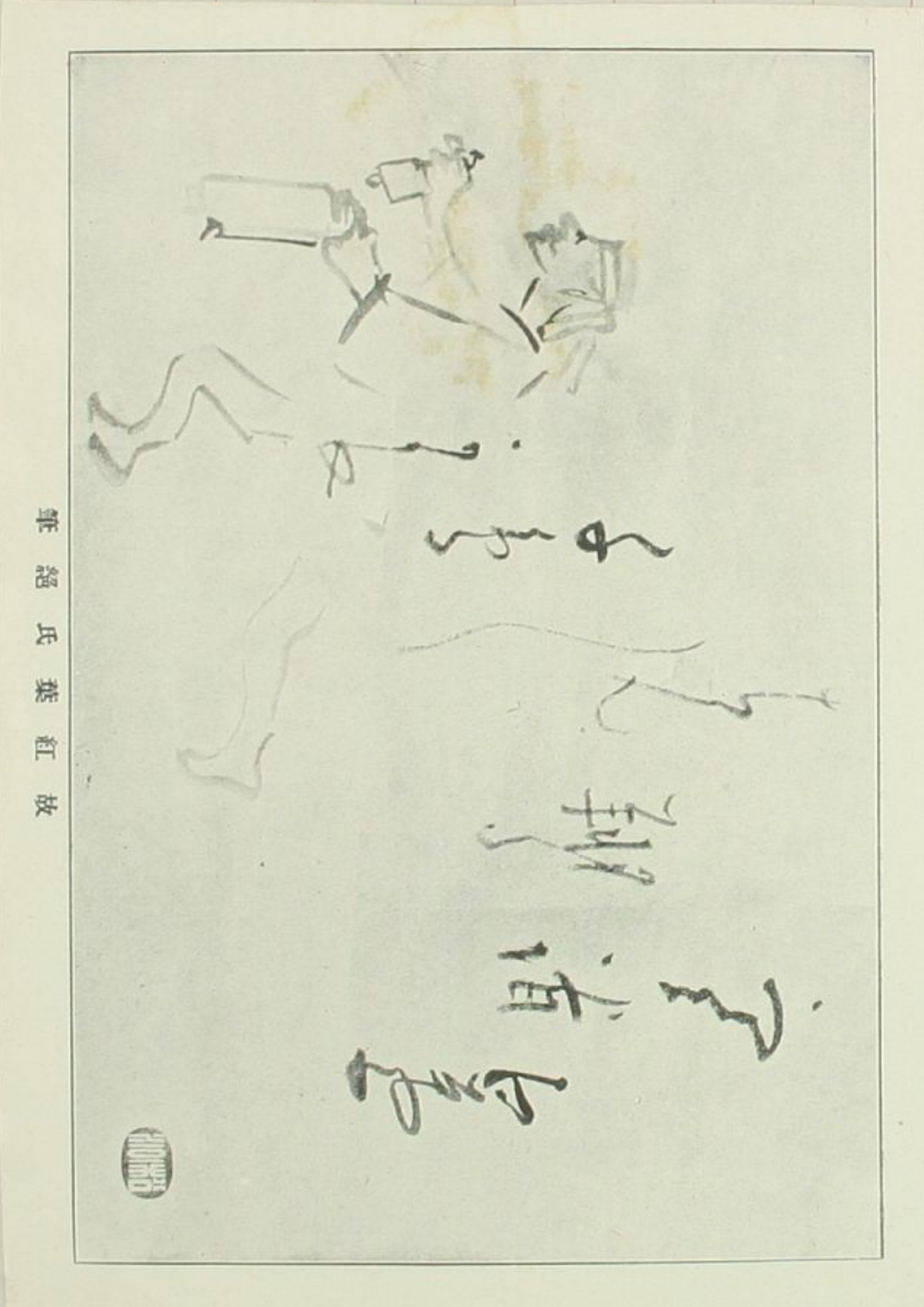
附て書ゆふも四十丸を、少く配るる蓋扱を
遺てのこゝ未段の少の遺印を誦ゆ



捺し編を漬る之れを封書に
箱あり漆を物に込めし
こぼくをうらまは塗中朱漆
る之蓋の守りもなまかすの
吾の出来を画きたり。又別々の阿波と題
する舟を映くはるゝの多々、他念の言と成る
始終解部弄式蓋にボの字とを蓋記するに似



物ころもーよめ



筆 堀 氏 葉 紅 故

話は少し前後しますがそれから尾崎君の書いたもので初めて活版になつて世に賣出したものが一ツある、其れが新體詩選の中に載つて居る『書生の歌』と云ふのです。丁度あの時分外山さんなどの大學連中が新體詩といふものを拵へて、大に書生が市中を歌つて歩いたことがある。それを美妙が如何にも文章がまづい、和讃だかまた歌だか分らない、あんなものより吾々が拵へて世に出そうぢやないかと云ふので、今も小供が謠ふ『敵は幾萬ありとも』と云ふ歌を山田が拵へた。其時に尾崎君も『書生の歌』といふものを拵へた。私も三ツ四ツ書きました。三人してこの小さな書籍が出来たのです。これが抑も尾崎君が書いたのは、一番初めに本になつて出たものでせう。今から思ふと紅葉の新體詩など不思議ですよ。御覽の通り本には縁山散史と云ふ名になつて居る。

國は何處を百里外
親しき人と手を分ち
立ては堅さ志

花の都に程遠し
頼みし親の味を去り
岩をも徹す桑の弓

矢竹心のいさましく
きつくなれにし敵衣
股に錐刻し壁穿ち
粗食に堪へて膝枕
身を立て名をば揚雲雀
千歳にかをる功績を
勉めよ君よ勵め君
諸葛もむかし書生なり

吾妻の空に遙々と
いつかは飾る綾錦
千辛嘗めて又萬苦
假寐の夢の覺る間も
とりの群なる鶴となり
立てん心を忘れじな
將相何ぞ種あらんや

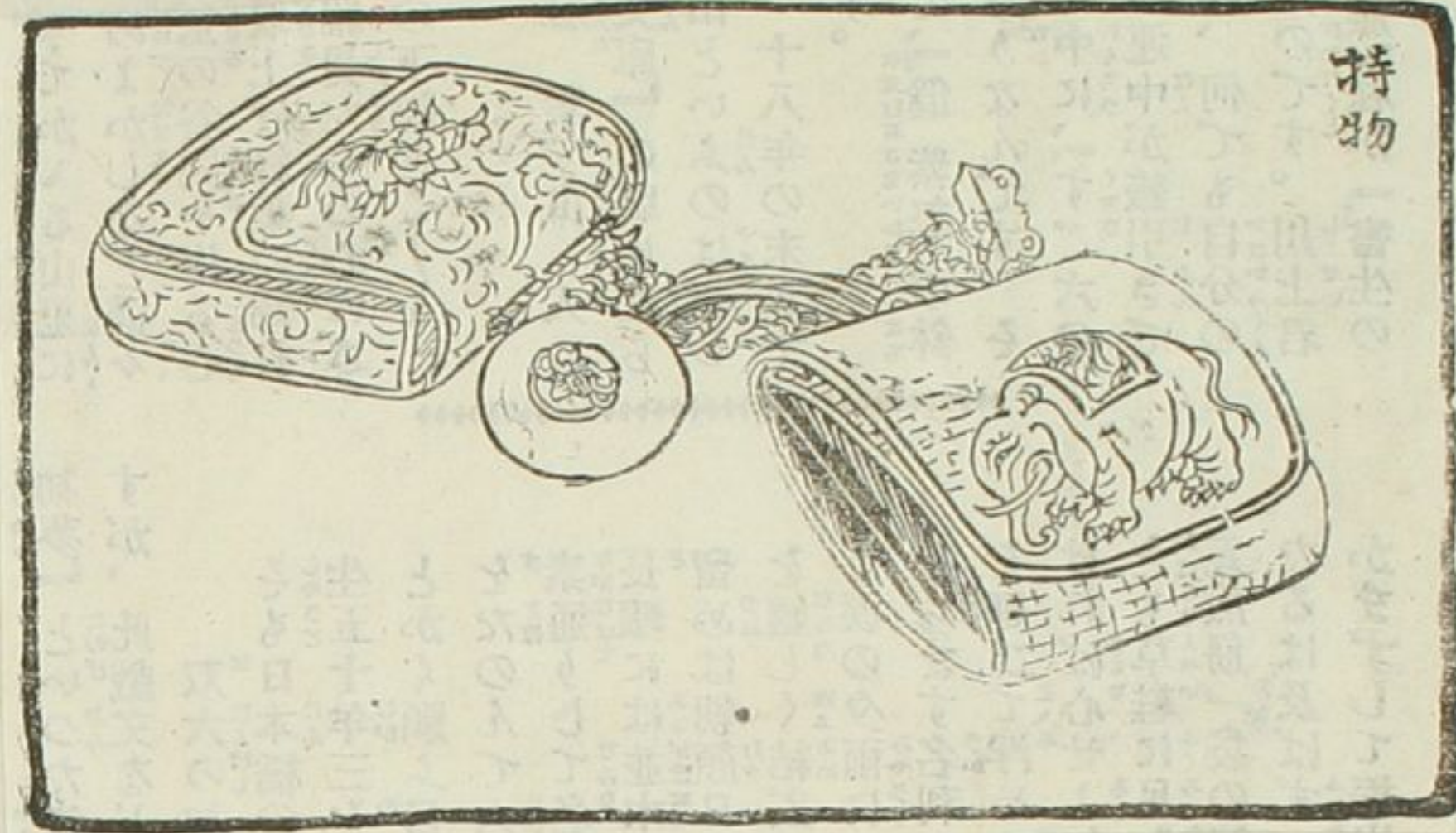
東橋原製

縁山散史
花の都に程遠し
頼みし親の味を去り
岩をも徹す桑の弓

矢竹心のいさましく
きつくなれにし敵衣
股に錐刻し壁穿ち
粗食に堪へて膝枕
身を立て名をば揚雲雀
千歳にかをる功績を
勉めよ君よ勵め君
諸葛もむかし書生なり

吾妻の空に遙々と
いつかは飾る綾錦
千辛嘗めて又萬苦
假寐の夢の覺る間も
とりの群なる鶴となり
立てん心を忘れじな
將相何ぞ種あらんや

(照參話談君華九國丸札引の筆自君業紅葉尾故)



也有の「鶴ころも」とか、許六の「風俗文選」などが大層好きであつた。それから小説としては御當人も言つてゐる通り、京傳や馬琴を餘り好かない、然し三馬は餘程好きであつたので、馬馬の戯文などもよく見て居ました。随つて當時は引札類などに書くことを大に得意として居ました。其時分に書いた狂文が今手許に幾つもありますが、其うち最も初めのものが小間物屋の引札、これが尾崎君の書いたものゝ中で、木版になつて世に出たものでは一番初めて、是より古いものはないのです。しんぞん

小間物開業御披露
 花の色彩ふ小町紅は、姉さん方の淡化粧によろしく、紅梅餅に彩る細工紅は坊ちゃんのお目覺にかなふ。良品はたゞこの店に限とて、年來の御ひのさをうけ。よろし小賣の繁昌は名に高砂の鶴とむれる龜井町にて。福島のああるじこたひ小町紅てう名より思つき。肌も衣通となる白粉より、黒かみの體ます御羅の油、其外珠玉の根がけはあれど、かけ直なく頭かけ元結の細き利にて賣弘む種々の金銀簪は風流新形を旨となし。蝶々鬢に似合ふ花かんざしの華美あれば、鍋町形には人柄

三千年前のねまをたれし九千のり
 劇雅堂といつた人が、一環三線法と云ふもので其比の俳優の似顔を書いた其時、尾崎が言葉書をしたのが摺物になつて残つて居ます。(九千のり)
 吉例粗書似もせぬつらね
 天地一大戯場目出度亥の春狂言の幕を開くやげに堯舜は且文王は立役其周王の正月を壽かんとてまかり出たるそれがしは寫畫好劇の兩花道いづれを僞と別ちなくさまよひあるく粗畫の娛弄樂屋をそる只一騎張子の岩石ふみたほし大河の浪板をどり越へめざすひわきはここの部屋かしの化粧鏡の内にいまこそ開くうどんげの花の素がほは名玉の磨かざれども千兩役者名代下から相中まで瓦礫もまじるあら玉の春の舞臺へ三階總出吉例會我のわるく洒落亂筆御免失禮粗書そのおもざしは似ましたか似たとこそいへ瓜の皮むいた處は草摺引ちぎれるほどな御ひいきの力もゆるまん奇怪な繪姿ハテ珍らしい鉢面じやナア
 朝比奈の紋に羽をのす鶴の巢くふ
 松のあるじ 劇雅堂

よき籠甲の中差に至るまで。すべて安直にて商ひます
れば。開業の當日より。斑紋櫛の齒のひまもさらず。あ
れもかうがいくと。遠近よりのお運びを願ふになん。

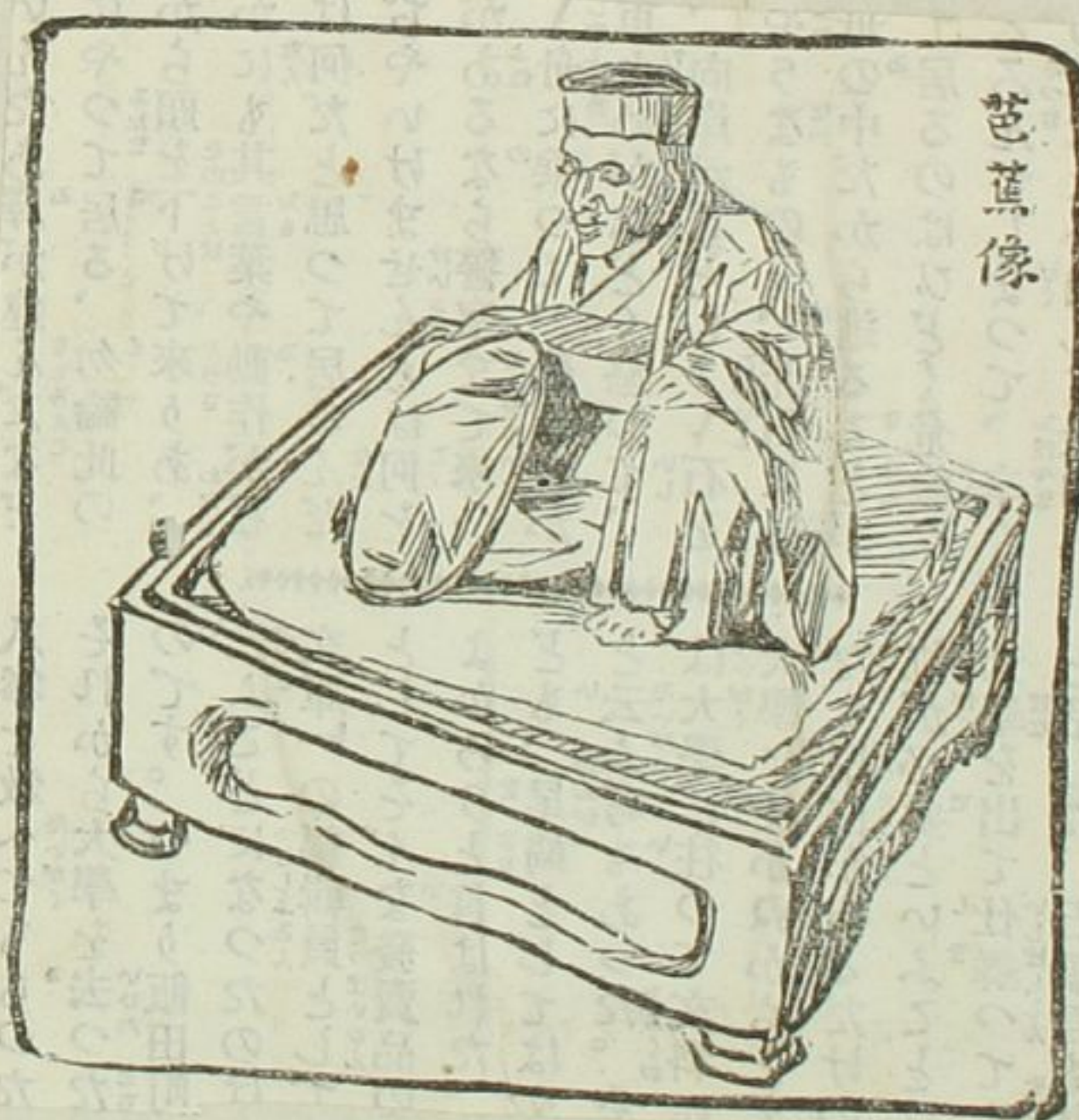
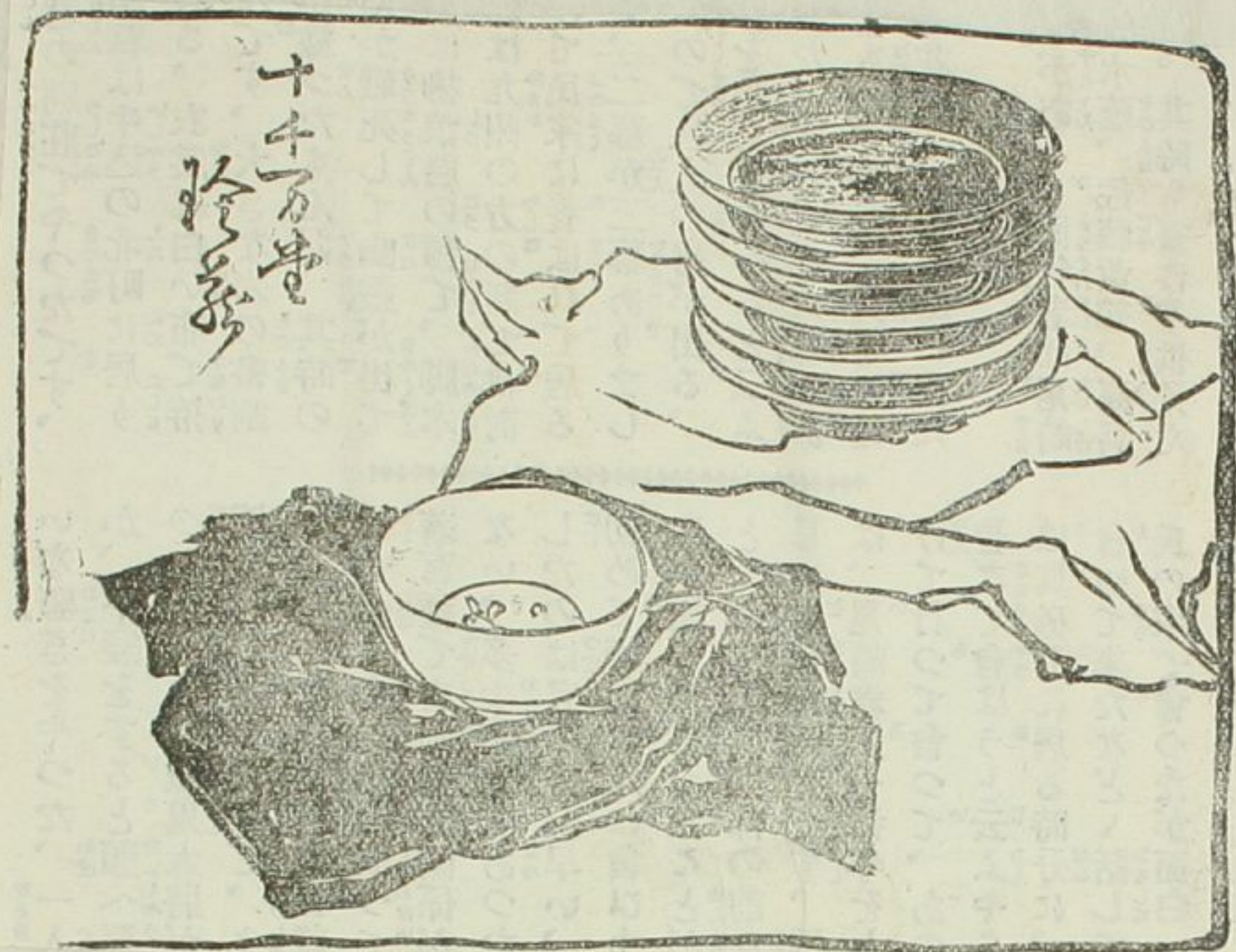
開業日

日本橋區龜井町

紅屋茂右衛門

當日龜景進上仕候

この引札は實に珍とすべきものであつて、今は殆んど此
處に一枚残つて居るばかりでせう。此禮として小間物屋
から石鹼を三ツ貫つて、大に得意であつたので、私達も
羨ましがらされたのです。そして其時分には尾崎君は斯
う言つて居たのです。つまり僕は筆を持つて世に立つ覺
悟であるから文字の付いて居る書物なら何でも讀む、日
本文西洋文を問はず、一切のものに目を曝して自分の見
聞を廣くすると云ふことは、目的を達するに一番確かな
手段であるから何處までも此主義を推通す積りて、又人
から物を頼まれた時には、小説戯文の嫌ひはない、辻雪
感に礙る引札でも構はん自分の精一ぱいを努めて書く積
りだといふことを言ひ居たので、其時分「また辻雪隠
の引札かね」といふ惡洒落もあつた位です。



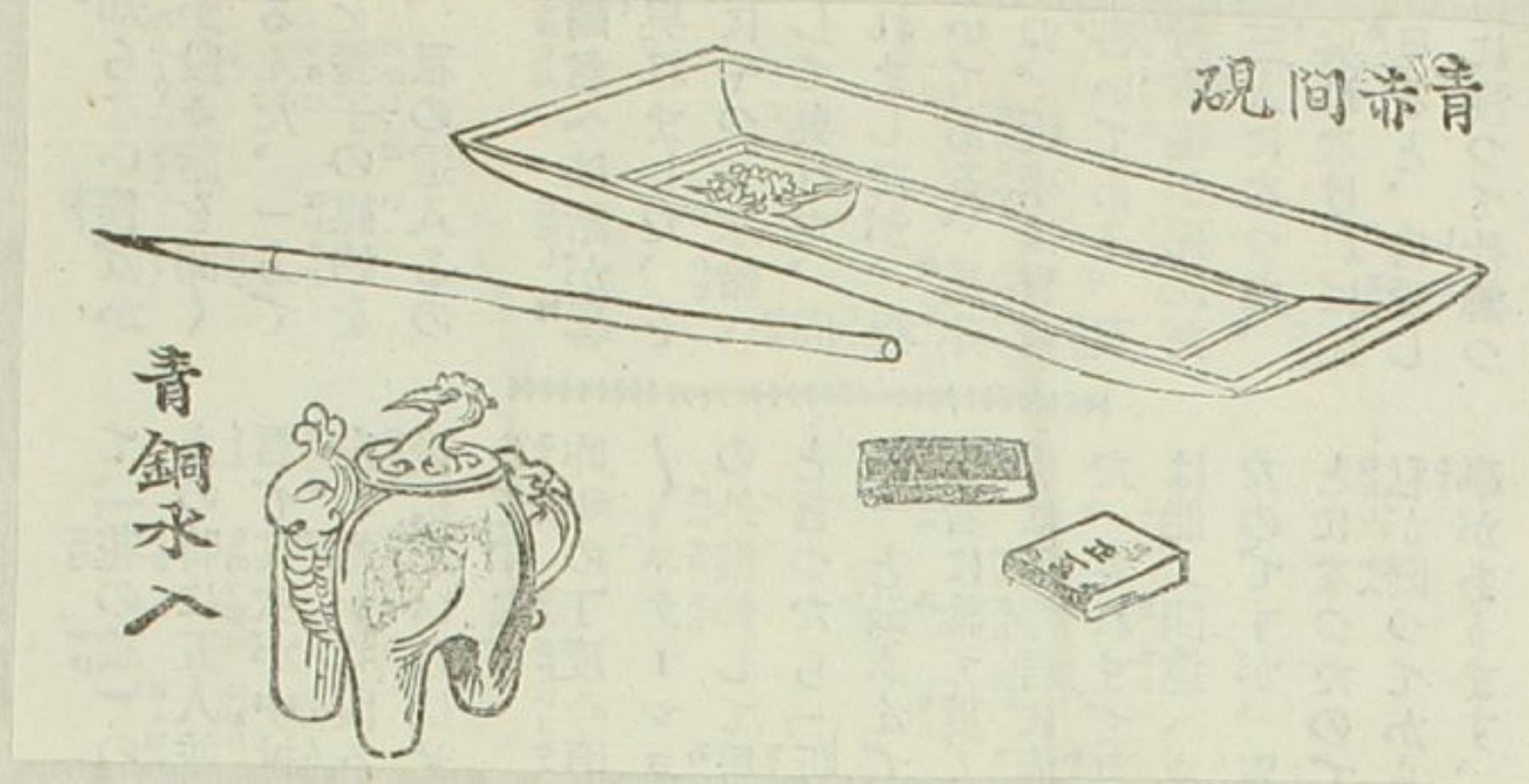
此の引札は實に珍とすべきものであつて、今は殆んど此處に一枚残つて居るばかりでせう。此禮として小間物屋から石鹼を三ツ貫つて、大に得意であつたので、私達も羨ましがらされたのです。そして其時分には尾崎君は斯う言つて居たのです。つまり僕は筆を持つて世に立つ覺悟であるから文字の付いて居る書物なら何でも讀む、日本文西洋文を問はず、一切のものに目を曝して自分の見聞を廣くすると云ふことは、目的を達するに一番確かな手段であるから何處までも此主義を推通す積りて、又人から物を頼まれた時には、小説戯文の嫌ひはない、辻雪感に礙る引札でも構はん自分の精一ぱいを努めて書く積りだといふことを言ひ居たので、其時分「また辻雪隠の引札かね」といふ惡洒落もあつた位です。

不可もなし香もなし梅の苔かな
これは梅が咲いて居なかつたと見える。其後の句は、所謂檀林派にかぶれてひどく宗因が氣に入つた時分なんです。

天渺々海漫々中にひよつくりかつを舟
なと云ふ句がある。

稻妻や二尺八寸それやこそ抜いた
此様な句には社中大笑をしたのです、これが此時分の句なんです。

何しろ「文庫」時代になつてから西鶴かぶれがしたのですな、一代男なども寫してしまいました。此時分西鶴物入文字屋ものを持つて居つたのは、私は御目にかゝつたこととはないが、淡島寒月君と云ふ人です。これが大變西鶴の藏書を持つて居られて、其人と尾崎が知己になつて、それから色々の物を借りて寫したのです。(九草中法)



硯間

青銅水入

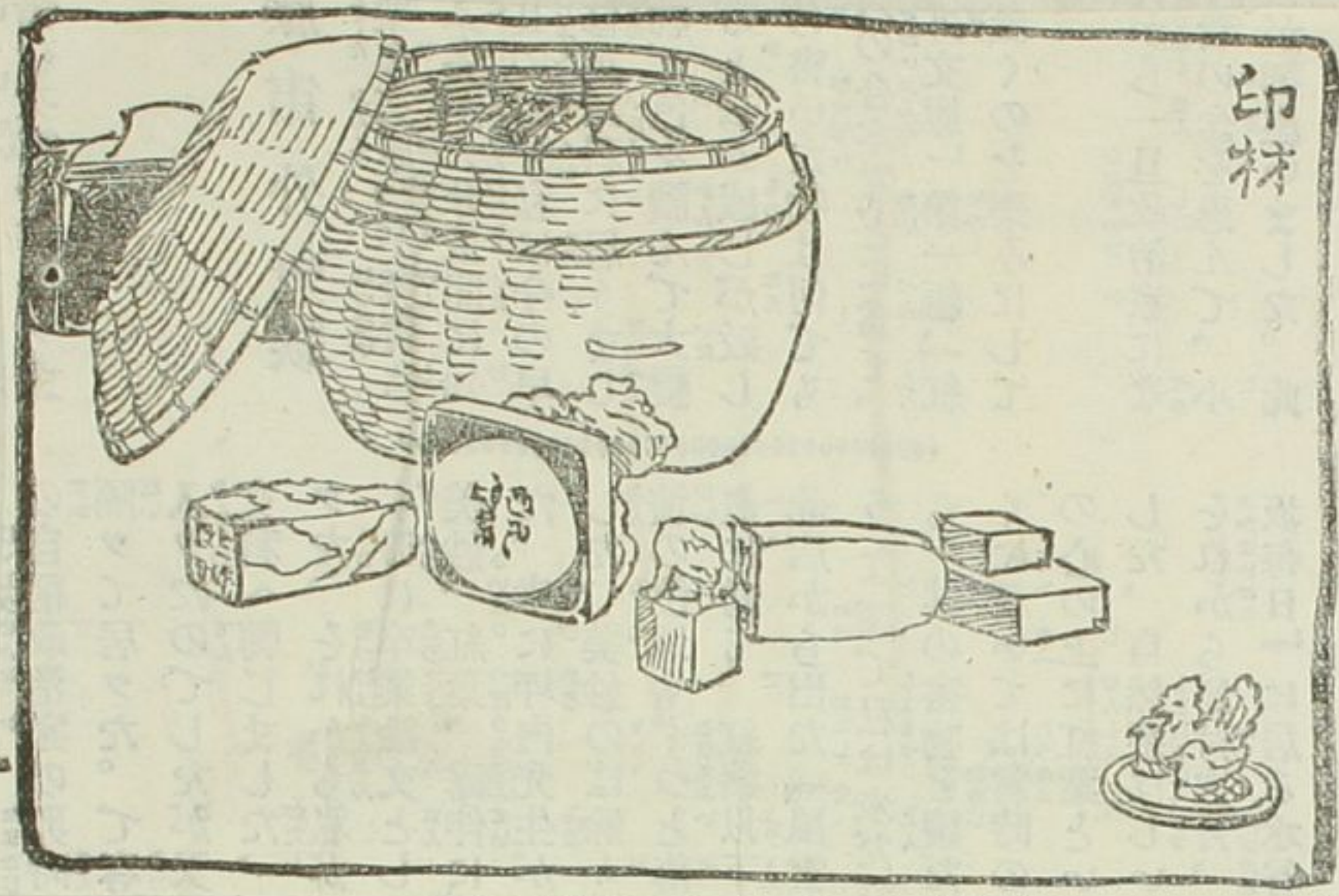
色紙の傳 九時半

の本を、之を作るまでの先生の苦心と云ふものは一通りてなかつた。此文章などは殆ど幾度直したか分らぬ位です。今になつては尾崎は實にまづいなど、云つて、自分の書いた物をひどくけなして居ましたけれど、其當時先生が此事に就ては、一句々自分が練つて書いた文章なんです。それで、私が此時分遊びに往つたときに、あれは何時だつたか日は忘れましたが、目の下を真黒にして居る。兩方とも、不思議な面影なんです。何うしたんだと云つたら、實は此「怨言の巻」と云ふのがある、此「怨言の巻」といふ處を書いて居つて、餘り自分が思ひ詰めたものだから、ひどく悲しくなつて涙が出たのだ、手に墨がついて居るの知らずに擦つたものだらうと言つた、これは勿論尾崎に限らず何人にも文章を書くうちに、自分が書いたもので自分が感して筆を止めたり、物悲しくなつて來た爲に思はず涙が出る位の事はあるのですが、尾崎には此例が多かつた様です。伽羅枕を書いて居るうちなどにも自分で物凄くなつて筆を止めたと話したことがある。とにかく此色紙は、一通りの苦心でなかつたのです。私が遊に行つた時に尾崎は吉岡君にかう言つてました。自分は強ち現友社を代表して居るから言ふのではないが、兎角自分の文章が世に出て、紅葉といふ名を發表するのであるから、しくじつたら僕が終世の失策になるのだ、僕は小説がまづいと云は

るのだ、其は錢が儲かるか損するかに止まるのだが、僕の方々に取つちあ容易な事ぢやない、出版が後れるなどは我慢してやらなければならんと、所が幸にも是れが大判であつたのです。



十時半 終幕



印材

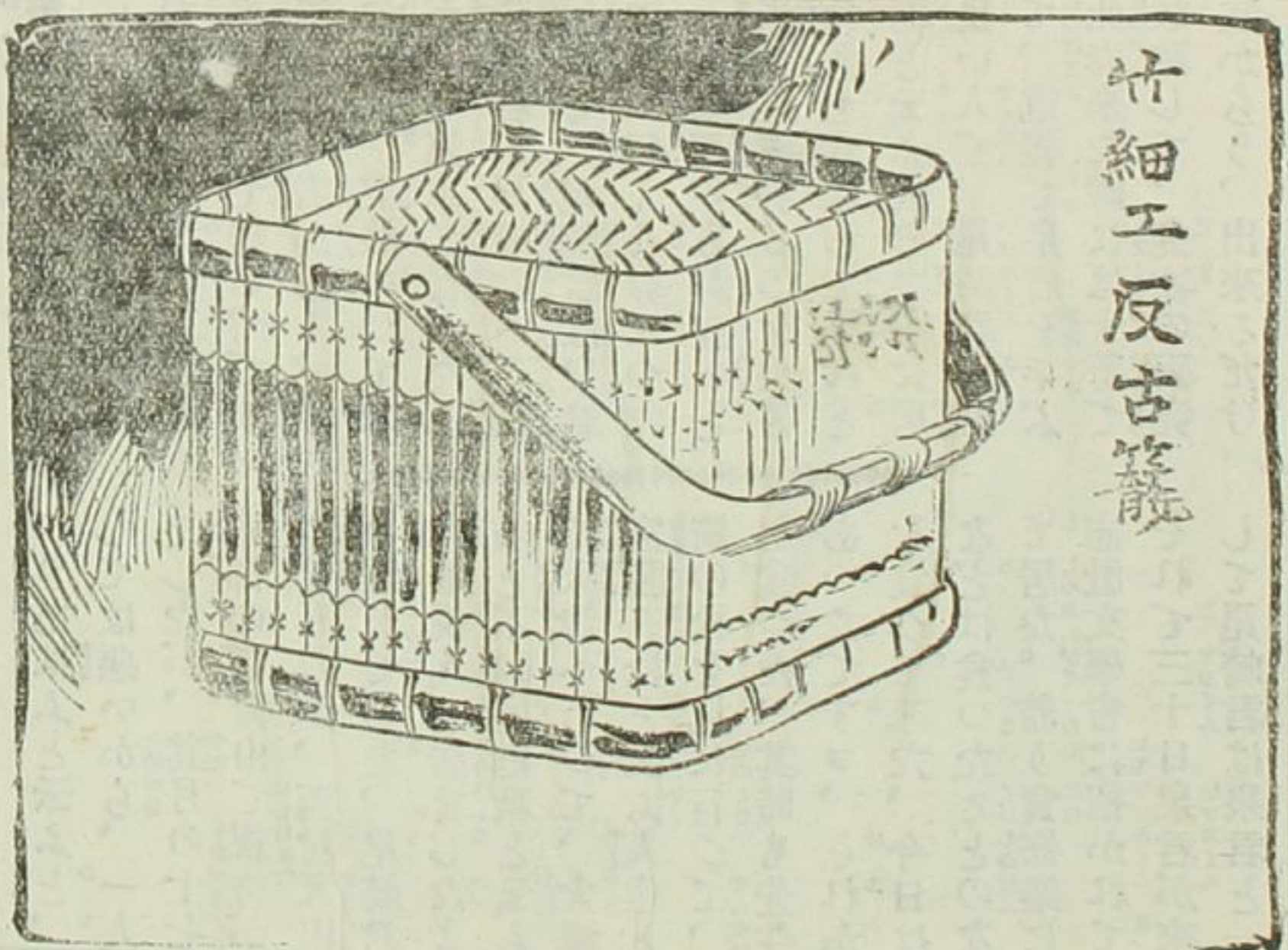
それから二十一年の夏、丁度私は卒業試験の前で鎌倉へ二箇月ばかり行つて居りましたが、尾崎君も矢張豫備門を卒業し、大學に入る時、私が鎌倉へ行つて居ると、青葉ほととぎす松魚老ひしか恨みなりと云ふ句を寄越した、是は彼の目に青葉山ほととぎす初松魚と云ふ句から出たんでせう、併し私はそんな事は知らない、尾崎君の自作だと思つて居るから、何うしても分らない、それで

松魚老ひたり老ひたれどなほ松魚かなとか云ふ句をかへして、あとで調べて見て、「目に青葉」と云ふ句から来たと云ふことが分つた、其時から尾崎君の俳知識は私より上つたのです。

私は又尾崎君から「小本を借りました、就中西鶴本などは、尾崎君に依つて初めて知つたのです、其時分私は貸本屋の本ぐらゐを讀んで居たので、貸本屋には西鶴本などは無いから、西鶴と云ふ名は聞いたがどんな事を書いたのか知らない、尾崎君は淡島氏などへ往つて珍書を漁つて、西鶴の「一代男」、「一代女」などを寫したのです、それを私に見せて呉れた、私も其頃は寫物を盛んにやる時分だから尾崎君から借りて寫した、寫本の又寫本です、「五人娘」は露伴君に借りて尾崎君が寫したのを、私が又借りて寫した、所が私は塾に居る時分、「好色一代男」の好色と云ふ字が困る、塾の風紀に關すると云ふので公

ば宜いんだが、堆積するから長くなるので、俳席などでも門生に向つては中々やかましい、此の状は何んだと云つて叱りつける、泉君でも小栗君でも皆な氣の毒のやうにやつつけられる、さうして字の遣ひ方や、假名遣がやかましい。

九三年



竹細工反古籠

然寫す譯にいかない、そこで夜他の者の寝しづまつた頃に、コン／＼寫したから中々手間取りましたか、尾崎君が、それを讀んで仕舞つたら、之を讀み給へと云、遂に

な事で、今まで知らなかつた西鶴本や、菟菟本を見ることを教へられた、併し私は面白いと敬服して居つたけれども、其文を學ぶほどの勇氣はなかつたので

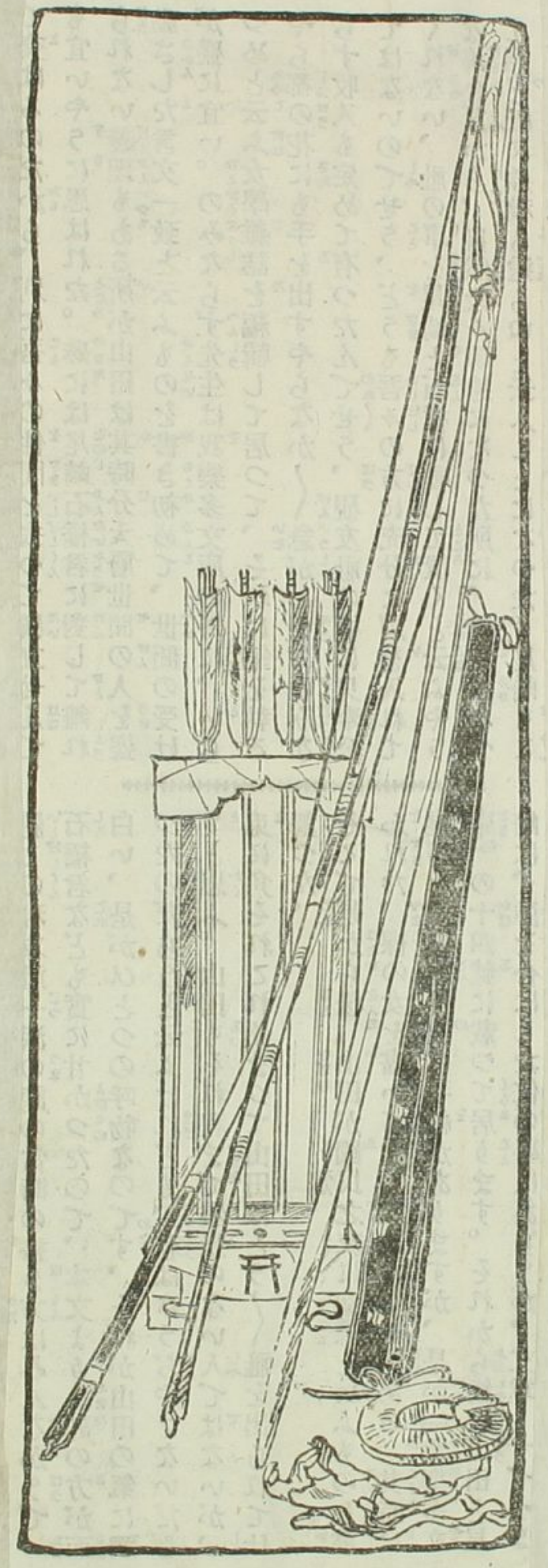
明治二十二年の四月です、尾崎君と二人で湯河原へ行つた事がある、勿論是は向ふへ行つて何か書く心算で、お互ひに原稿紙を五六百枚持つて行つた、所が湯に入る身体がダレて仕舞つて少しも書けない、尾崎君は山歩きが好きで、私は御供さ、イヤだと云ふのを無理に引張り出して、山を跋躡するんです、もう二三日経つと、無聊に苦しんで来るものだから、私を引張出して裏の山でチツ木をやるんです

後に盛んにチツ木を奨励した事があつたが、其の時分から始めて居るんだ、丁度四日目だつたが、馬鹿氣な事がある、私に足の裏を搔くことが好きて、尾崎君も亦足の裏を搔くことが好きた、無聊に苦しんで居た時だから「搔きツことをしやう」宜からう」と云ふので、蒲團の上へ二人があべこべに寝て、火箸で足の裏を搔くのです「此處か」も少し上だ」つてな事を言つて兩方で搔いて居る、實に馬鹿氣な圖でありました。(ハハ後)



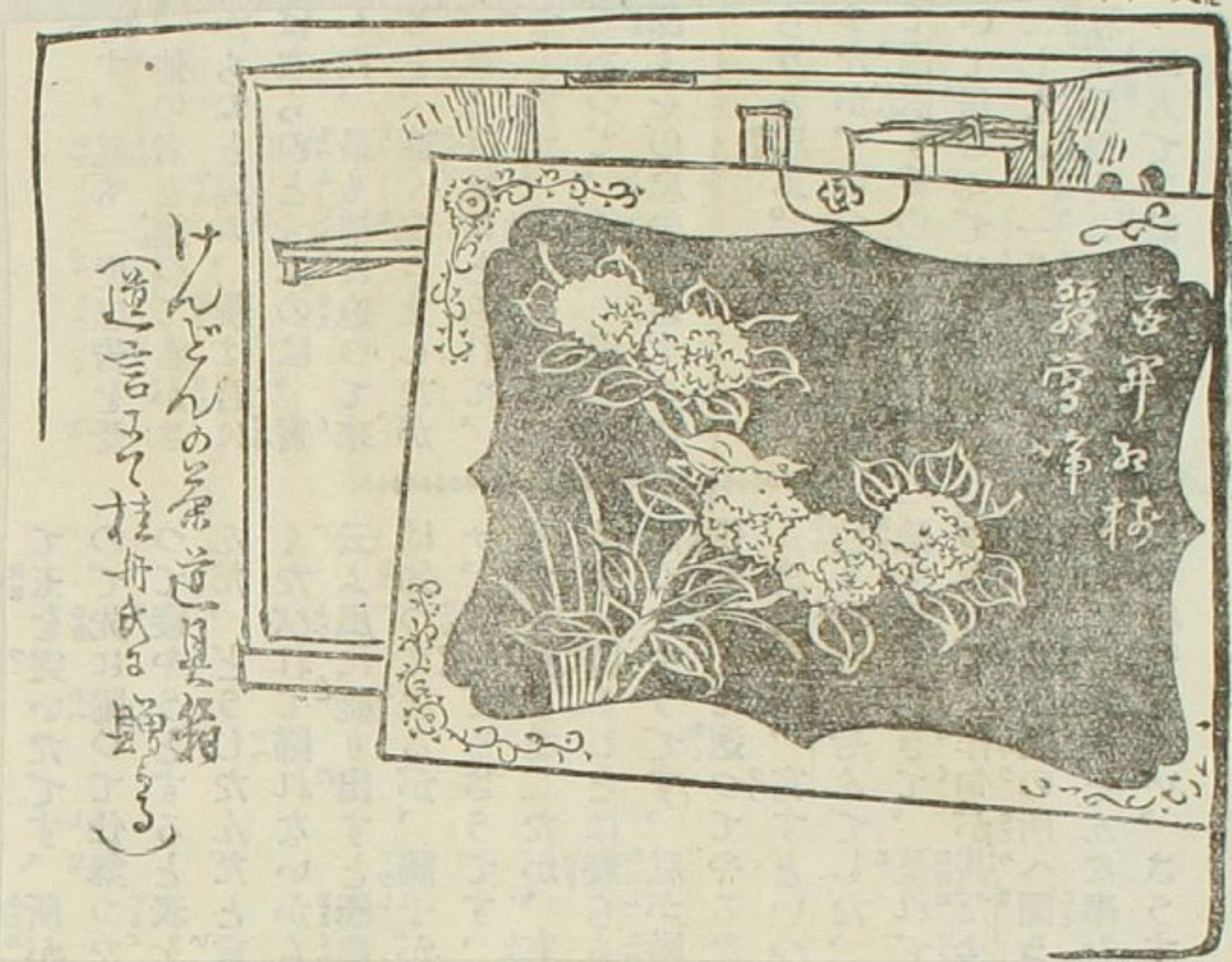
香爐 香の銘金桂

一輪挿



それから此頃まで尾崎君は原稿は夜書かれましたが其當時は日中だつたてす。私は日のある所では書けぬもんだから何時も夜書いたです。晝でも部屋を暗くして書きました。其爲めか私の御承知の通り陰氣なものばかりです。尾崎君のは華かだつたです。尾崎君は日の當つて居る部屋に幔を張つて、墨を磨つて其墨のキウ／＼とするやうな時が一番書き易いと言つて居られ

た。何時頃からか知れませぬがそれが夜になつたてすな。それと共にあの人の作に變化がありはしないかと私は思つて居るです。又同時に其時から健康を害されたのかと思はれるです。御承知の通り煙草は喫ふし、菓子も始終二品も備へて置いて人にも勧め自分も食べて居られました。こんなことから不健康になられたのかとも思はれる。實に其時代のことを考へて見ますと、飯田町時と云ふものは實に人と交際するにも子供のやうで戯言も言ふし、天真爛漫であつたです。(ハハ後)

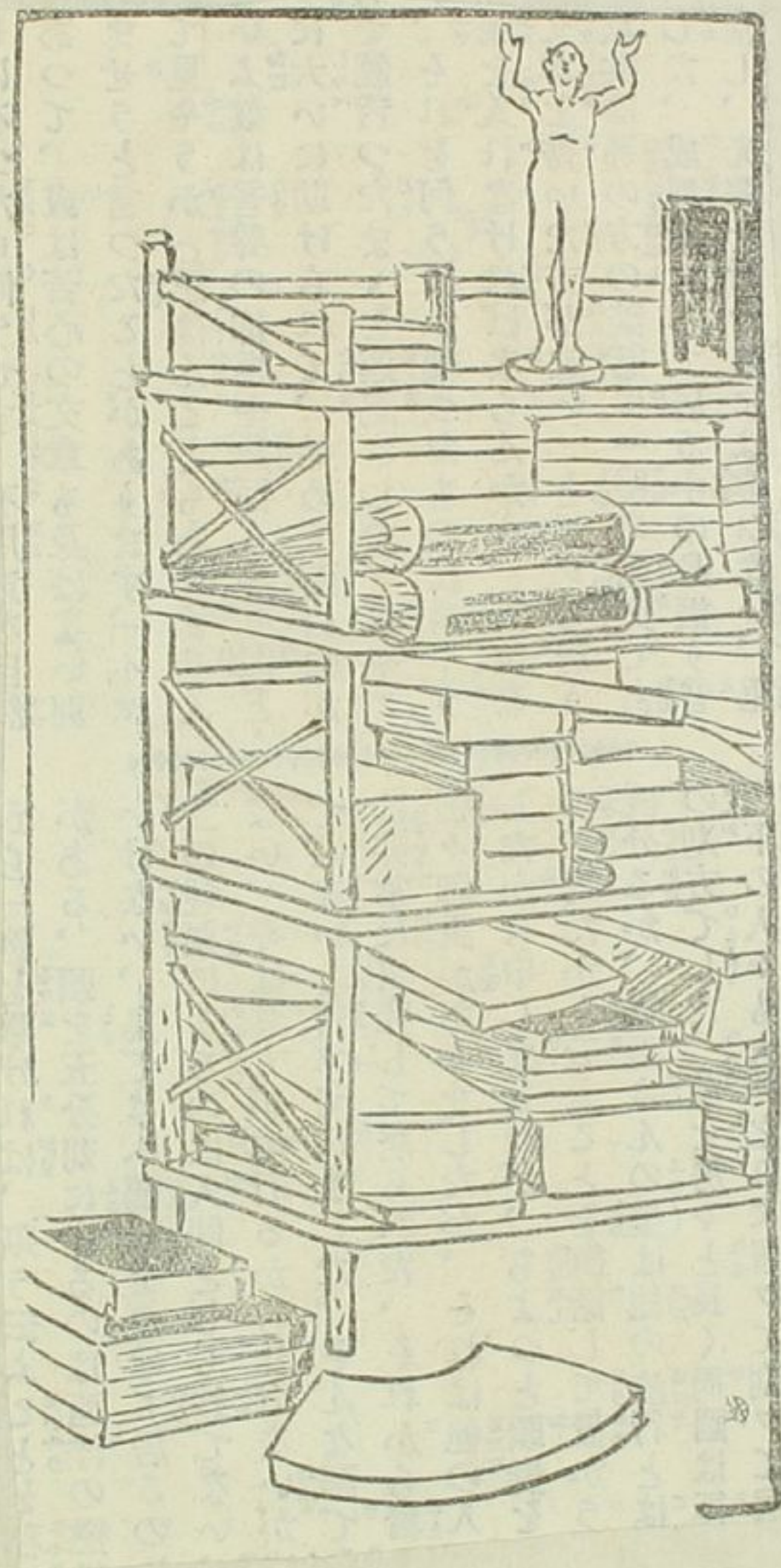


▲秋聲會の俳席では、竹冷子がまづ文臺で、紅葉子はその脇宗匠と云ふ觀があつたが、紫吟社では即ち子が宗匠で、余はいつもその補助をして居た。随つて子が俳席に於ける態度は、専らこの紫吟社に於て認められたのである。

▲時刻は大底午後一時から。その時刻の五分前迄には、子は屹度文臺に坐つて居た。て、時刻が來ると直ぐ題を出す、その題が頗る難題。

——初心の者には読み方さへ解らないのを、子は親切丁寧に、一々それを説明してやつた。否、子は例の癖として、艸體の頗る達筆に書くのだから、實に余にさへ、その文字の讀めない事もあつた位だ。

▲兎に角紅葉と云ふ人は、樂な道を樂に通るより、苦しい道を苦しがつて通るのを、萬事に付けて快とする方であるから、一寸した運座の題でも、成るべくむづかしい、人の滅多に詠まない、云はゞ難題に作例の無い題斗りを出し、他を苦める代りには、自分も一生懸命に苦しんでゐる。



▲随つてその作句も、決して多きを食らない。僅に一題一句、時には句作無しに濟ます事さへあつた。之に反して余の如きは、少くも平均一題二句以上は出す。巧遅と拙速との兩極端は、子と余とに於て明かに代表して居た。イヤだらしの無い句を澤山吐くなアとは、よく子に罵られた事である。

▲俳席整理の上から云へば子の如きは實に之に

長じたもので。一ト通り頭数が揃つて、一ト渡り題の説明が濟み、いよ／＼一同句案に掛るとさア水を打つた如く、一座はシント静まり返つてしまふ。是は子が、例の嚴重に雑談を禁じ、質問用談の如きをさへ、極めて簡單に、且つ小聲に發せしめた故である。

▲總じて紫吟社の特長を云へば、その俳席の嚴

打算し来らざる可からざるの要を認め居れり特に
外交の事に至つては最も一山口村より打算するが
如きの陋習と洗脱せざる可からざるは言ふ迄もなし
云々

紅葉會所見短評 (續) 彌生山人

○觀世清藤氏の仕舞 丸岡九華氏の地で融を舞
つたが流石斯道の嫡々である已に舞臺の準備が昔
後に出来て居るのに畳の上で舞つたのは何故です
か足拍子などが調子が乗らなくて不好いでは有り
ませんか高田博士が問ふたら私の方では踊の舞
臺で舞ふのを彼は言ひます私は構はないんですが
仲間が罷ましのので答へた罷樂仲間には頑固な
人が多いと見ゆる

○和歌三神の踊 日本で文學の神と云へば住吉
衣通姫八丸の三神である文學者の祭りの餘興に此
の踊を選んだのは其の當を得た者であらう然るに
番付を見ると衣通姫さぬ子八丸とさぬ子赤人つな子
と有る俗曲には赤人を入れて住吉を省いた者と思
はる何子々々であるから何處の令嬢かと思つたら
紅葉會の女中であつた同館の女中と云ふ者は藝妓
の税を納めて居ない想であるが市中の藝妓屋で斯
う云ふのを雇つて居るがせたら税だけ助かる譯だ未
だ其處に氣付かないのは抜け目のない世の中に
珍らしい事である

○心の闇 紅葉山人の遺作の内であるから藤澤
が座頭で演じたのは其の前に川上が開演の辭とし
て文學者美術家と俳優の接近を希望する旨を述べ
た藤澤の按摩師の市は上手な者で之に次では宿屋
の番頭(役者の名を聞渡せり)よく出来たお糸が打
たれて居る佐の市を庇護し時服部の社寺局長の意
辭に是が芝居だつたらお糸さんの役は成駒屋の福
助云々と演べる際譯やら今では芝居だど半燈を入
れた

○喜撰の手踊 守住月華(初めの名は岩井後市
川久米八、月華と改めたのは桂と云ふ名から取
つたのだと云ふ)の喜撰に川上貞奴の小間 是は六
歌仙の踊の内であるから文學者の祭りに縁があつて
其の當を得た選定である月華の老て轉變な動作は
威風の外なかつた貞奴は美は美であるが踊は藝妓
的踊だと冷評した人が居たが着服の色台の取合せ
は西洋の服装術を研究した者に見えて成服した黒
の秋付に袴の下着之に紅の長袴着に白襟の襷袴で
帯は光澤のある襟珍と来て居るから如何にも色
の配合が好い或る人は束髪が踊に對して移りが悪
いと評した人は髪を付けなかつたから高尙なの
である髪を付けたる日になると月華も坊主の髪を
冠らなくてはならぬ凡そ坊主の髪は醜い者はな
いので地顔で踊つたのは月華も此の處備けたので
ある以上は皆夫々から會へ寄附した者である想だ
○食堂の雑沓 白き布を布き詰めた机の上には
櫛の廣物類の狭物類々の甘菜辛菜が盛つて有つて
机の下には蒲葦が花らに敷いてあるのは恰で神嘗

の大盤かとも思はれる其れを女中が取別けて客に
呉れる趣向だが二百餘人の來客數であるから手が
足らない中には酒が来て猪口が來ぬのもある圓飯
ばかり来て肴が來ぬのもある故世話人が手傳つて
取分けて渡す客の内でも氣の利いた人は立食前に
自ら好きな肴を取つて来て食ふと云ふ有様中に不性
な人は尻を据る乍ら是は九で火事場の機軸刺衣で
も着て來なければ追付かない杯と惡口を利いて居
るのもあれば折詰と正宗でも鏡々に渡した方が好
かつたのに杯囁いて居るのもある角田竹冷君出て
來て未だく本當の立食へ往て見たまへ人を突飛
して肴を取らなければ食ふ事は出來ないのです
○世話人の徽章 當日の發起人と世話人は香圖
を描いた徽章を付けて居た香圖は源氏五十四帖の
符號で五本の線を組合して五十四種を造つた
者である當日のは紅葉會の圖であるだらう然るに
發起人の方は可いが世話人の方は線が六本あ
つて香圖では無いしきつた

○紀念葉書 紅葉山人の像を刷つた私製ハガキ
を席上で紀念に賣つたは是は某堂の寄附した物であ
るが會の雜收入にする爲に十錢宛に賣つたのだ想
だ十錢とは些と慈善會的直段だと云ふ評があつた
が其の書が粗末な寫真刺衣であるに拘はらず紙質
は透明な上等の名刺用紙であるから實際高いと云
ふ程ではないのだが印刷の方を氣張らなかつたか
ら直打が分らなかつたのである此の葉書の數十枚
を館の女中に呉れて之を賣つて呉れ收入はか前達
に遣ると云つたので小さな女中が直段も極めずに
骨を折つて賣つて居た此の際聊か直段が十錢以下
に下落した様であつたが最後に世話人の所にも賣
れ切れになつたので直段が頗かに騰貴して五十錢
と云ふ珍直を現はしたが大橋新太郎君は其でも可
い一枚買つた想は斯様に買つた人々は座中
の知名の人々に字の畫だの筆づ、書いて貰つ
て合作の出来上つた處で投函した中には所謂ぬひ
子様やさぬ子様のお筆を得て喜んだ人もあつた女
中連の方は新派の俳優の素顔が拜まれたのでは是も
大恐悦であつた

斯くして有益な事面白事可笑しい事で和氣瀾々
の中に午後九時半ごろ解散したのである (一完)

兼任辭分 (十二月十八日)

- | | |
|--------------|--------------|
| 工務 則勝 | 檢事 工藤 |
| 時雄 | 時雄 |
| 十時雄 | 十時雄 |
| 宮崎縣警部 | 宮崎縣警部 |
| 長崎縣立醫學部校長に任ず | 長崎縣立醫學部校長に任ず |
| 長崎縣立試験院技師に任ず | 長崎縣立試験院技師に任ず |
| 長崎縣立試験院技師に任ず | 長崎縣立試験院技師に任ず |
| 長崎縣立試験院技師に任ず | 長崎縣立試験院技師に任ず |
| 長崎縣立試験院技師に任ず | 長崎縣立試験院技師に任ず |
| 長崎縣立試験院技師に任ず | 長崎縣立試験院技師に任ず |
| 長崎縣立試験院技師に任ず | 長崎縣立試験院技師に任ず |
| 長崎縣立試験院技師に任ず | 長崎縣立試験院技師に任ず |

羽子板願役者妍美形取手欲流涎
爲沽且的掉頭拒非吝代金三四圓

肅な事の他に、題が難題なる事、而もその難題が、概して人事に關し、その人事も概して衣食に關し、さてその衣食の中では、比較的食が多の觀があつた。是畢竟出題者たる紅葉子自身の、例の江戸子の嗜好から出た事で、試みに子の句十句を取つて檢すれば、少くも其二三は、例の衣を詠し食を頌して居る。

▲さてべ切の時刻が来て、いよいよ清書と成ると、子また自分筆を取つて、この清書に取りかゝる。於是宗匠は、また執筆掛持と云ふ觀がある。が、子に清書されたら最後、假名遣ひや當て字などは、一々嚴重に直されてしまひ、甚しきは當人を呼び出して『こんな字が何所の國にある』など、字のくづし方まで叱りつけられるから、皆びく／＼して居た。その代りそれに依つて、大いに學ぶ所があるから、寧ろ大いに謝すべきである。

▲それからこの俳稿が廻つて、衆議判と云ふ事に成ると、何しろ例の麗はしい筆で、見事に書きあげられて居るのだから、見た目には惚々と

するが、その代り時々讀めないの困つた(中には自分の句さへ讀めなく成つてしまふ)。ても質問すると叱られるから、その儘讀めたつもりで通してしまふと、後に披講に成つてから、初めてよく解つた。『あゝさう云ふ名句なら、先刻頂くのであつたのに』などと頭を搔く連中もあつた。

▲所てその披講が、また頗る愉快であつた。何しろ彼の調子の好い聲で、高々と讀みあげるのであるから、大概の句は名句に聞える。その代りよく／＼の歌句は、『何だこの句は!』と云ふ一喝の下に、句主も名乗らぬ中から抹殺されてしまふ。

▲此の如く、子は句を選むに頗る苛であるが、自分の句に對してさへ、また非常に嚴重であつた。一代の俳傑十萬堂紅葉として、家集を選むとすれば、可なり大きな物が出来る筈だ。それに頃日聞く所によれば『十萬堂百句』なるものが、眞の百句に過ぎないと云ふ。百句と云へば甚だ少ない様であるが、その少いのが、即ち

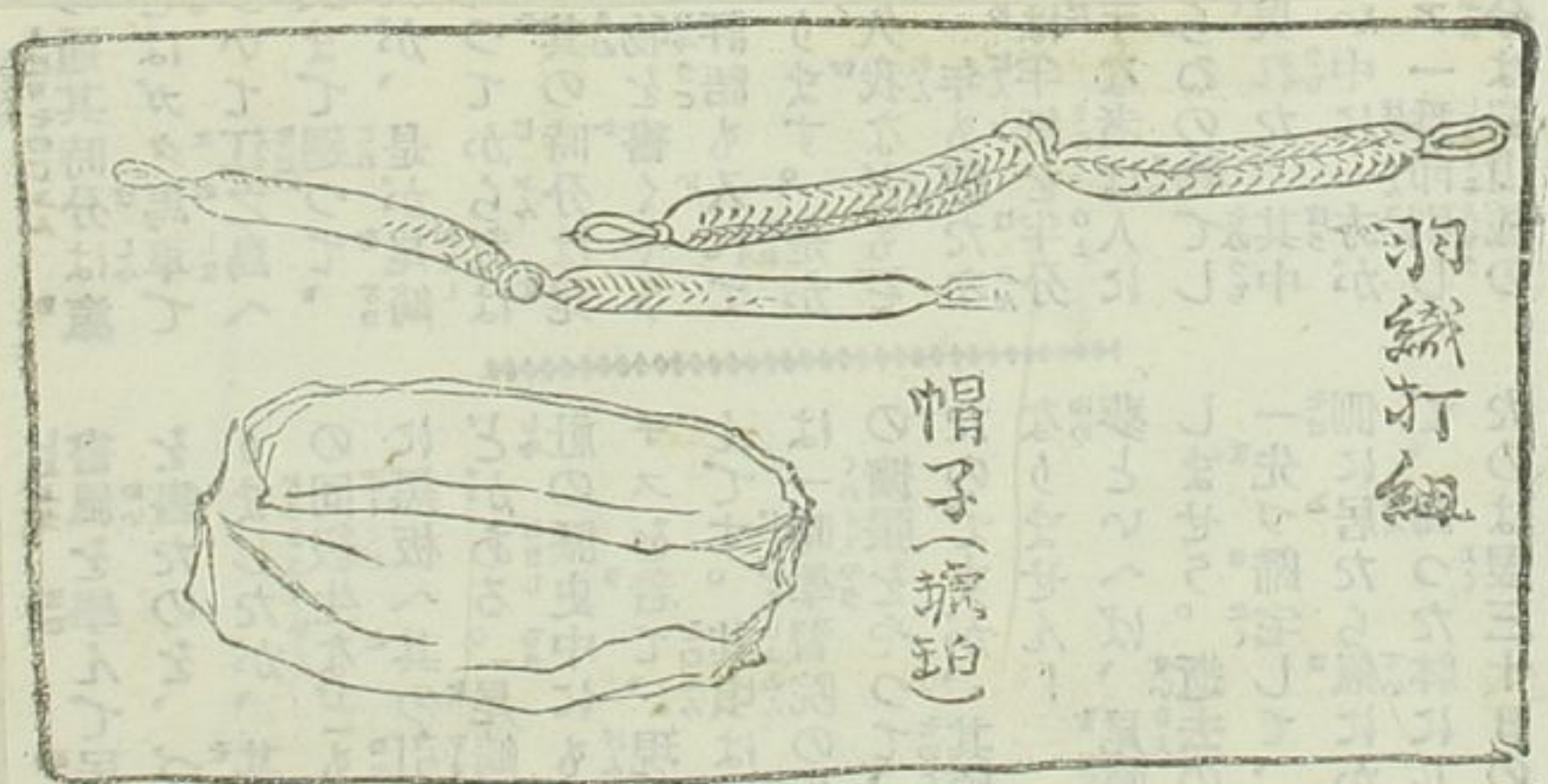
十萬堂句集の十萬堂句集たる所、南京玉の一升より、眞珠の十粒が貴いと云ふ事は、今更こゝに云ふ迄もあるまい。

▲子の俳人として關係して居る俳會は、紫吟社秋聲會の他に、晚鐘會、竹馬會、白人會、また佐渡の沙鳥會などであつた。就中白人會は、元來余が伯林に滞在中、彼地の留學生諸氏を集めて、初めて興したもので、其後この會員の、余より先に歸朝した連中が、岡田虛心子を介して、子と麥人子との出席を依頼して、東京に於ける白人會を開いた。白人會が子の死を悼んで之に贈るに西洋風の月桂冠を以てしたのも、實は此縁故の爲である。

卯枝石載定氏



紅雲紫雲
胸中扶元
の微章也
也念しる保ねす



羽織打紐

帽子(振鉞)

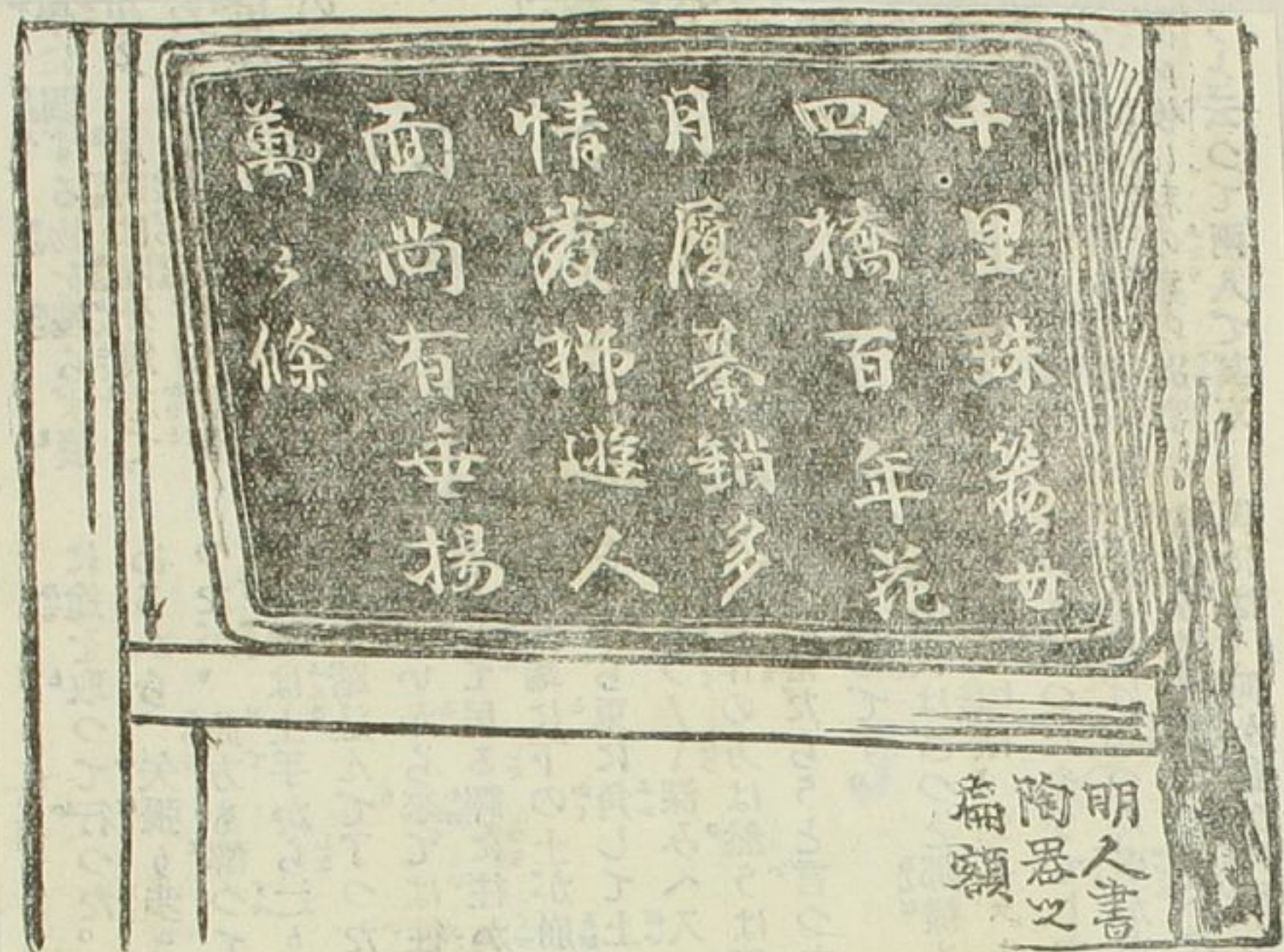
○幼時と學歷

- 慶應三年十二月十六日芝區片門前町に生る。
- 小學校卒業の後東京府小學校に入り、傍ら石川鴻齋に就て漢學を修む。
- 明治十五年三田英學校に入る。
- 明治二十一年法科大學に入る。
- 全二十二年轉じて文科大學に移る。

○青年時代と成功

- 明治二十年秋巖谷小波氏等と視友社を創立し雑誌『雅樂多文庫』を發行す。
- 明治廿三年飯田町より牛込區北町四十一番地に轉ず。
- 全年讀賣新聞社に入る。
- 全廿四年秋本郷區森川町一番地に轉居す。
- 全廿五年春牛込區横寺町四十七番地(臨終地)に移轉す。
- 全年夫人菊子を迎ふ。
- 全廿八年角田竹冷氏を輔けて秋聲會を起す。
- 全廿九年俳諧名家選を編む。

- 全三十二年夏、佐渡に遊び煙霞療養の記あり。
- 三十三年俳諧類題句集を編む。
- 全三十四年五月、修善寺に遊ぶ。
- 三十五年夏讀賣新聞社を退く。
- 全年七月、二六新報社に入る。
- 全三十六年、俳諧新潮を編む。



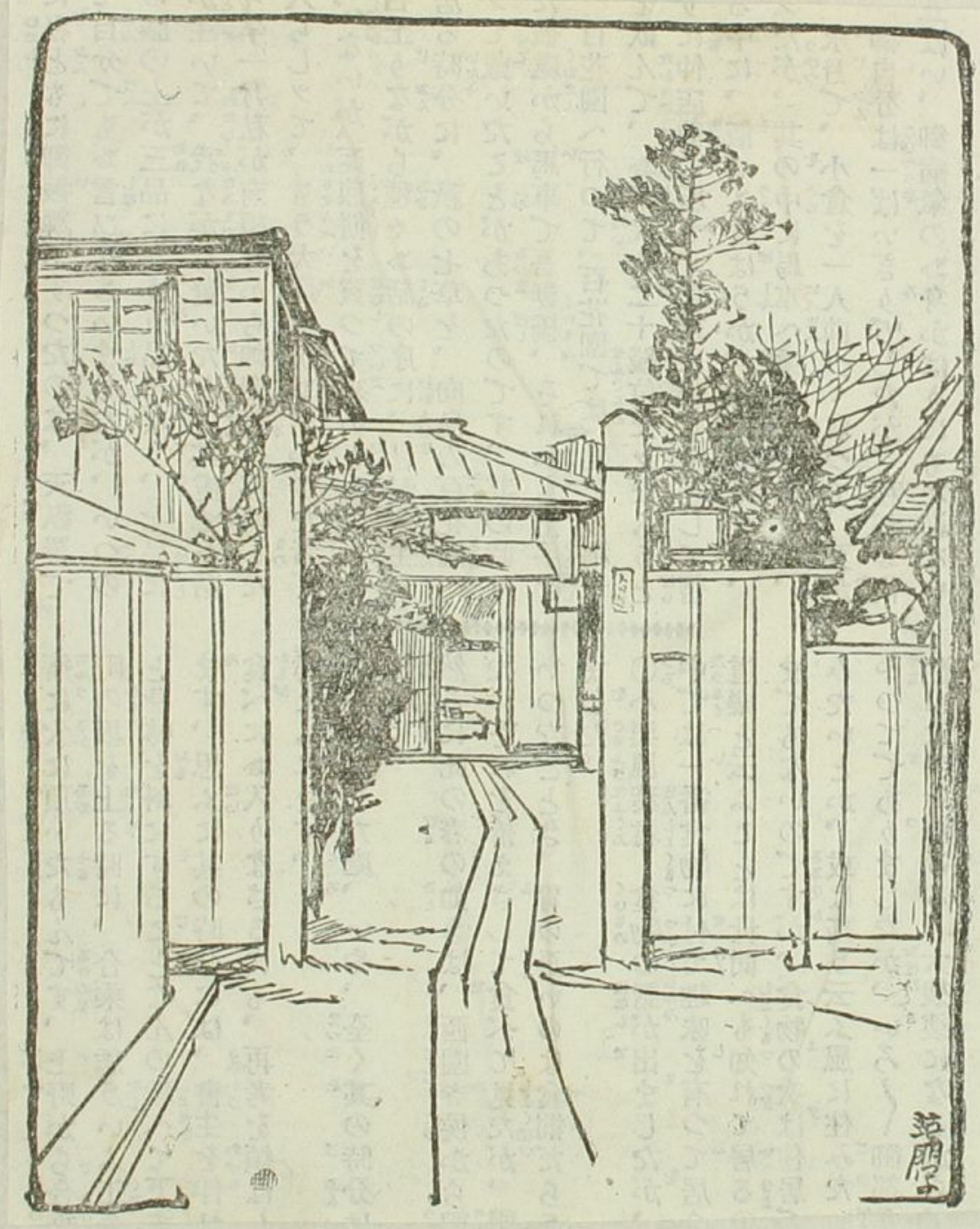
川上眉山の『雅樂多文庫』

飯田町の家の、尾崎の書齋は西寄の四疊半で、一間別に
なつて離亭のやうになつて居た。例の談話好きで又談話
上手であるから、殆んど絶えず其處でいろ／＼な人に
接して縦横に快談した。其時分の尾崎の意氣は殊に盛で
兎に角時の文壇を革新すると云ふ考があつたから、盛に
新趣味を鼓吹したもんで、其内に文庫の方の評判がい
よ／＼高くなつて来る。そこへ吉岡君が来て新著百種の
話があつて其時に色懺悔を出したので、確か明治廿二
年頃と思つて居る。丁度其前から居た、それまでは未
だ餘業といふ考もあつたやうではなかつたが、断然作家を以
て世に立たうと云ふ考が十分に熟したやうであつた。勿
論其前からさう云ふ考はあつたやうではなかつたが、まだ確然し
た定りは付かなかつた、其初高等學校時分にも、尾崎は
少しの間文科の方に行つて居つたが、法科の方が知己が
多いので、間もなく此方に歸つて来た、それから大學に

行くときも初は私共と一緒に行き、科に入つたのです、其時分てす、色懺悔が出てから更に評判が高くなつて、例の日就社から聘せられたのは、然うですあれは二十三年の頃だと思ひます。

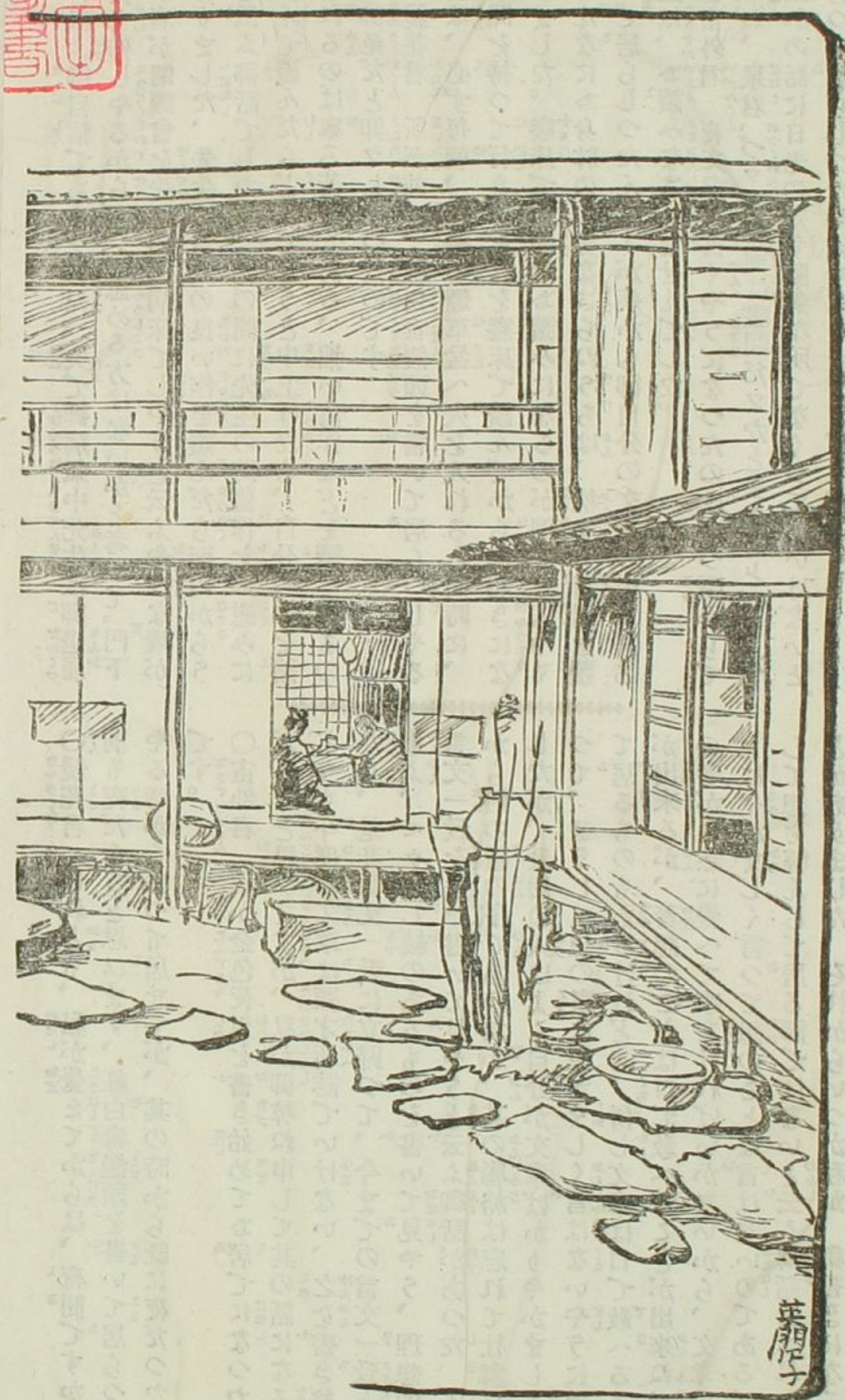
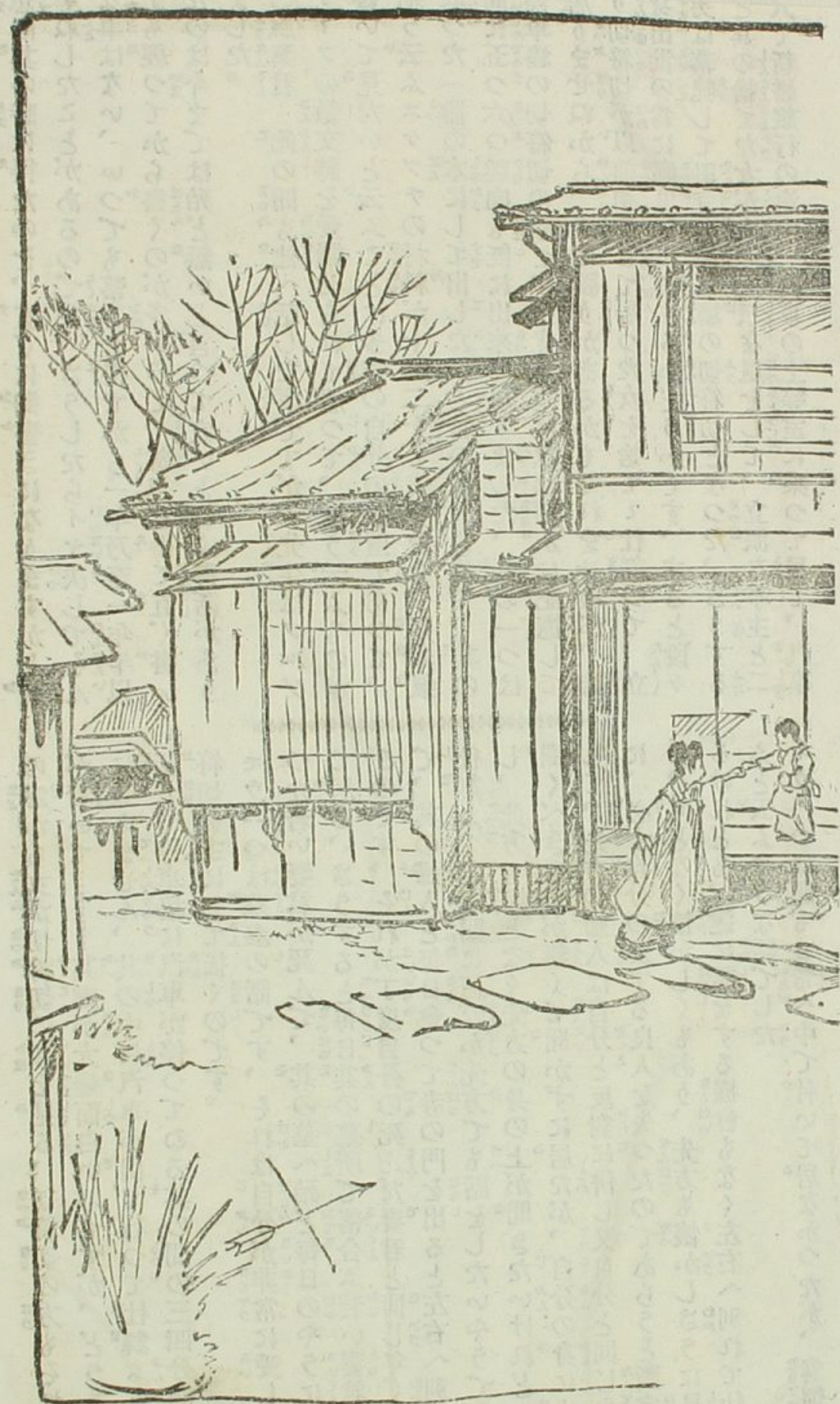
それから大學に移つてやつて居る時分も、矢張り書く方に身が這入つて居るから、學校の方は自然と留守になつて来る、それで一年許り経つてから兎に角縁の近い文科の方へ移つた、私は矢張り家の関係からして法科に居なければならぬのであつたが、好い鹽梅に話を付けて、尾崎と同時に移つた、國文科です。處が最う其時分は製作一三昧で、其方が骨に喰入つて

了つたのだから、遺るには遺つたが二足の草鞋を履いて居る心持です。よくあの運動場の脇の芝山で、池を前にして足を投出しながら話したのは、いつも製作の事ばかりで、斯う云ふ立案をしたがどうか、斯う云ふ描寫を遣らうと思ふが何うだとか、材の取り方、こなし方、然ういふ事て持切つて居ました。然うあの時分學校の圖書館へは能く行きました。時間があると圖書館へ行つては、文藝に關するものは殆ど皆讀んだ、あの頃には文學類のものを他の人が餘り讀まなかつたから、前に借りたときに讀んだところを折つて置いて、一月許り経つて復た借りると其儘になつて居た位で



遊之前一週阿ま出巻
新編二枚折(病床社)原をいし(まのい)

上、遊戯の町、真
下文臺





(影攝月二十年三十三治明) 齋書君葉紅崎尾放

後持赤の信

それから近頃のことにて御話致しますと、丁度大學病院から出なすつて芝の權島さんとかの別荘に暫時居られた時に泉君と一緒に訪ねました、其時は大變工合の悪い時だと仰有りましたが、でも快活に例の雄辯浴々て以て話された、側に讀さしの『莊子』がありまして、それを讀んで御出でになつたのを見えます、丁度「化及吾」といふ印が彫れて来たばかりの所でした、其時には既に死を覺悟されて居つたものと思はれます、泉君が「化及吾」と云ふのはどう云ふ意味でせうと問はれた、「こりやア莊子の中から選んだのだよ、詰り死ぬるお録が己の所へ廻つて来た」と云ふ意味さ」と云ふのでした。既にあの時からどうも死を決して居られたやうに私は思つて居ります、

それから泉君に向つて「人間も何だぬ色氣はなし、食氣はなし」となると宛然仙人に成つて了ふね、十圓の札が先達から紙入にそつくり遺つてゐるが、却々使ひ切れぬ、散歩に行つても目下必要な物は買ふ氣になるが、少し後まで取つて置かうと云ふやうな物は買ふ氣にはなれぬから、些とても跡の者に金で取つて置いて遣らうと思ふもんだから、と云はれ

○紅葉先生の弓術

南岳生

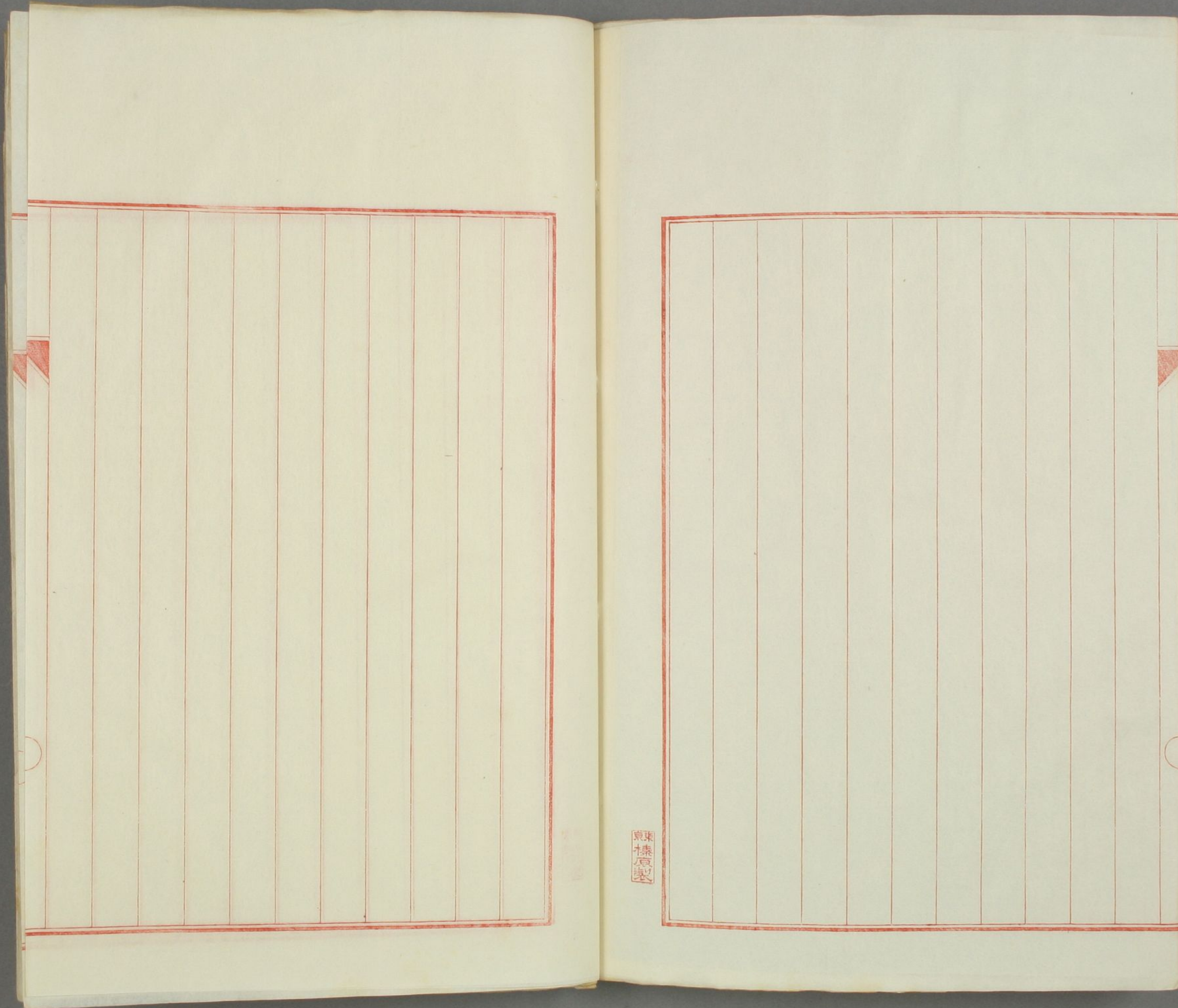
弓術に於ける紅葉先生の腕前は素人としては實に立派なもので、中りよりは射前の方へ重きを置かれた、だが其道の先輩に就て研究されたといふ譯ではない、多少は黒人からして講釋も聞かれたであろうか何しろ總てに熱心に研究せられたる結果遂に立派な射手となられたのである、強て流派を曰へば、小笠原と日置流との間であらうか、先生の常に通はせられた矢場は牛込通寺町の岩田であつて、この矢場では先生に續くものはなかつた、年寄の武藏川等は日々先生の指導を受けたもので今では佳なりの腕前となつて居る同人も今日となつて先生に指導されたを大に悦んで居る。して先生の中りの標準は、的前で尺二は八分、五寸に三分五厘、射割なれば十射に三枚は割られたからして先づ中りは普通の方である、して常に用ひられた弓は一時は五分八厘位の表面千段巻の騎射弓を愛せられて居た、此の弓は餘程の名弓であつた轍は四ツ

て更に微笑せられて「人間もなんだね、一圓か二圓の金を持つて彼を買ふか是れに使はふかと三方四方へ迷つて居る時代でなければ面白くない」と云つて微笑して居られましたが其中に種々話の出来た中に、是は私に對しての注意でしたが、どうも君は人と交際するのに少し下手に出るやうな弱い所があるから些立合負の氣味がある、何方かと云へば交際の上から云へば損かも知れない、私の主義は「氣に召したらち買ひなさい、お氣に召さなければ止しなさい」と云ふのです、私などは何處までも其積りであつて居ると云ふことを話して下さつた、實に自分の弱點であると云ふことは感じて非常に此の忠告に對して感謝の意を表した次第であります。

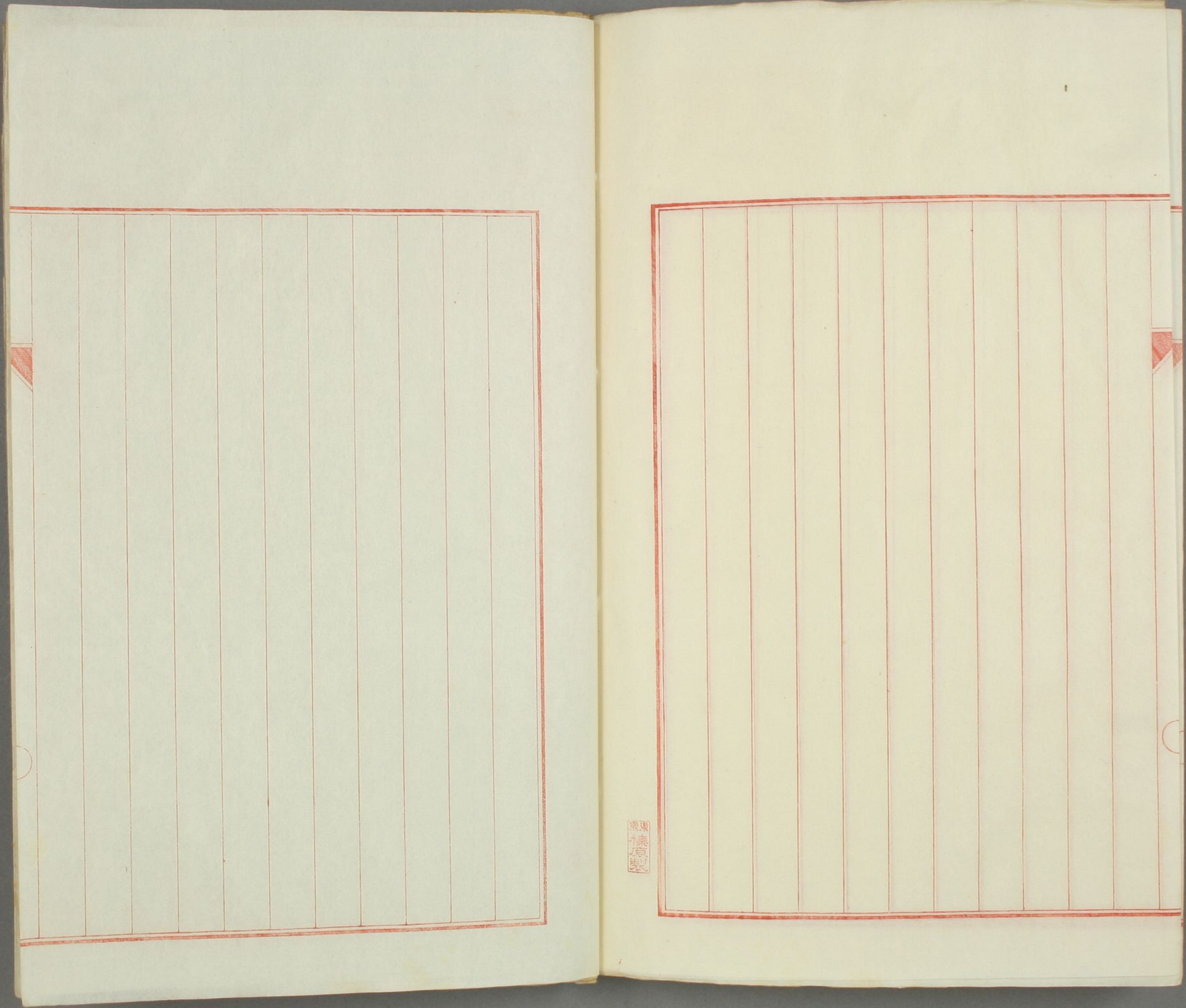
懸て矢は七々位の鷹の羽であつた。
さて先生の弓杖ついて胴作りから打起し引取り。離れ。未來。の形ちに就いて聊か略評を試みるに

胴作り及打起しは至て叮嚀の方にて。中じきりなりに除々と曳き絞り頼付も丁度口割れにて止まり誠に立派な姿勢であるが惜い事には少し上半身が後に引ける爲め下半身即ち下腹より腰以下に力が満ちて居るのがさ程に目立たぬのみならず折角餘裕のある持ちこたへもあたら瓦餅に屬し離れ際に至つて時々右手にて無理に離してやる様子がある。其都度下腹の力らが稍々たるむ。はづみに鶴の毛ほど右手を送りつゝ離れるので矢か必らず的の喉下へ落ちるか或は後ろへ射出すが實に惜いとてある夫は先生自身にも既に氣が付かれて居るのだけれど容易に此の欠點がなをらない、十射のうち二三射は必らず此の欠點を演じらるゝ、此の時には未來の形ちは必らず右足を左足の方へ送りつゝ右手は開いたる儘姿勢を崩して殆んど一直線となつて仕舞ふ。此に反して先生の射心地のよき時所謂調子づいて充分に引絞り頼付に矢棚の落付きたる後

徐ろに上半身を前にもたれさして右手の脇を出來得る丈背部に廻され然して下腹に力らを含めて自然離るゝを待たるゝ時の姿勢は泰然として動かず殆んど別人の如くである此時には未來の形ちも鑄形に倣たる如く見るからに立派な姿勢で先生自身は大ひに満足の時なのであつた



東
棧
製



東林書院

の池を子孫にたすむにあたり植物の生殖器に
 一たるをたすむをいふとあはれをばせしむ
 かなりの常期をたの池をたすむをいふとあはれ
 たるをたすむをいふとあはれをばせしむ
 かなりの常期をたの池をたすむをいふとあはれ

東洋植物

植物の生殖器

油野成一郎

余が本邦産蘇鐵生殖器の研究を初めたるの
 今を去ること凡九年前にして曾て歐洲に於
 て學者が植物の生殖器に關する研究發見多
 かりしも植物家の所謂蘇鐵科に屬する植物
 に就ては其生殖器を研究したるもの殆ど無
 し但二三の研究は是無きにあらずしも特
 に著しき成績としてあらざりしは是れ蓋し蘇
 鐵類の世界中を通じて凡七十五種あれども
 孰れも熱帯、亞熱帯の原産にして學術の中
 心たる歐洲に於ては温室に栽培するもの、
 外これなく固より研究上充分の材料を得ず
 故に歐人の此研究に従事せるもの殆ど皆無
 なるも怪むに足らず獨り現任ジャバ島ボイ
 テンソルク植物園長トロイア氏の此職を帶
 て和蘭よりジャバ島に赴任するや直に同島
 産の蘇鐵に就て研究を思ひ立ち頗る重要な
 論文を公にせり氏の斯學上の大家なるを
 以て其研究素より精密なるものなれども如
 何せん其出版の今を去ること凡二十年前にあ
 り其研究の方法も不完全不十分なる所多く
 余輩後進より見るも誤謬と思はるゝ點無き

に非ず隨て今より六七年前迄の歐米の植物
 學教科書其の他に於て蘇鐵科生殖器の記載
 の主として此トロイア氏の研究に基きたれ
 ば余の此等の書を編く毎に此部が他の部に
 比して甚しく不足なる所あるを感じ常に遺
 憾に思ひ居たり若し蘇鐵科植物學上尋常
 平凡の植物ならばそれも可なれど蘇鐵類の
 植物系統學上より考ふるに梅、櫻の如き
 花を開く高等植物と昔や厥の如き劣等植物
 との間に位し進化學上最も面白き位置を占
 むるものなれば其生殖器の研究は學術上
 決して忽にすべからず是れ余が本邦蘇鐵の
 研究に志せる所以なり
 余の明治二十八年の夏頃より材料の採集に
 着手せり蘇鐵の東京にも諸所に栽培しあれ
 ども東京の寒き故果實を結ぶことなし因て
 余の廿八年廿九年三十年の三年間夏期凡二
 三ヶ月づゝ鹿児島に種子島に滞在して材
 料を集め相當の藥品に貯へて持ち歸り農科
 大學の植物學教室に於て研究に従事せり
 是より先き當時理科大學の助手(現任産科
 中學校教員)平瀬作五郎氏の本邦産公孫樹
 即ち銀杏樹の生殖器研究に従事せられた

るが明治廿九年の中頃に至り此植物に於て
 下等植物に於ける精蟲の如きものを發見し
 たり是れと殆ど同時に余も兼て研究中の蘇
 鐵に於て公孫樹に於けるものに彷彿たる精
 蟲を發見したり從來植物界に於て精蟲なる
 ものの單に苔、厥の如き劣等植物に限ると
 の植物學上に於ける定論なりしが故に余
 の蘇鐵、公孫樹に於て精蟲を發見するや
 方々一誤謬に非ざるやと氣遣ひ充分研究に
 研究を重て其決して誤謬に非ざるとを確め
 廿九年の末に至り此發見を世界の學者に報
 告せんが爲め其の大意を獨逸の某學術雜誌
 に送りたり(但右大意を記せる論文は廿九
 年の暮に彼地に著したれば右出版の三十年
 の初めなり)後尙ほ此精蟲の幼稚なる時
 より充分成熟するまでの變化、蘇鐵雌器の
 發育、雌雄素の行爲其他につき種々有益な
 る件の後に纏めて一論文となし平瀬氏の三
 十一年の中頃理科大學紀要に余の同年の大
 學紀要并に獨逸の某學術雜誌に出したり
 公孫樹并に蘇鐵の精蟲の形殆ど同一様
 にして唯蘇鐵のもの公孫樹のものより大
 なるを異りとす而して苔、厥の如き劣等植

物及び植物の精靈類の微細なるものにて強
度の顕微鏡に依るに非ざれば見えざるもの
なれども蘇鐵、公孫樹のものに割合に大に
して殊に蘇鐵の精靈の如き時に肉眼にて
も見えらると思はる位なり孰れも其上部
に多数の毛あり此毛に因りて運動し其運動
によりて離器に達し其結果として種子を生
ずるなり
此研究が植物學上甚だ重要なものと認
めらるゝに至りし理由一般の讀者に於て
解し難き事なるべしと雖も先づ試に其大要
を舉げば古より學者が植物を研究するに當
り先づ第一に此等學者の材料となりたるも
のの花を開く草や樹木なり是れ誰人にも
目に入り易きものなれば固より當然のこと
なり爾來學術の進歩に伴ふて研究も愈々精
密となり學者も漸く昔や微の如き下等細微
の植物に目を注ぐに至れり然れども其初め
の花を開く高等植物と花を生ぜぬ昔の如き
下等植物との間に判然たる境界ありて此
二つの全然異なるものと考へられたり今日
にても普通の人の斯く思ふなるべし然るに
學者の研究進歩に隨ひ此二つの間に古人

の思惟したる如き判然たる境界なきこと明
白となれり是の事實の植物學上最も重要
なる原理にして植物系統學上根本の原理な
り併し乍ら蘇鐵や公孫樹の精靈發見以前に
も精靈の單に昔や蘇鐵の如き下等植物に限ら
れたれば隨て下等植物と高等植物との間に
判然たる境界なしと云ふもの、一方にの
み精靈あり一方に絶えて是なれば尙ほ其
間に著しき境界ある理屈なり然るに公孫
樹や蘇鐵の如き花の咲く立派なる高等植物
にも昔や蘇鐵と同様精靈あることを發見せら
れたる以上此境界の全然取拂はれ隨て高
等植物と下等植物との間に判然たる境な
しと云ふ原理に確乎不惑の基礎を興ふる道
理なり即ち此點に於て余等の發見の植物學
上重要なものと認められ學者の賞讃を受
けたるなり尙ほ此研究上に面白き有益なる
事實あれども余が専門に亘り一般讀者
に解し難ければ茲に略することとして尙
ほ次に一二件の大要を述べれば下等植物の
精靈の体の構造に就て其頃學者の説二派に
分れたり即ち精靈の元來一箇の細胞より變
化し來るものにて此細胞の生物生活の原素

にして主として原形質と稱する半流動體の
物質と核とより成る一派の學者の説に因れ
ば精靈の單に細胞中の核の變化したるもの
なりと云ふ他の一派の説に因れば精靈の單
に核のみならず原形質も其一部分たりと云
ふ論議決せず是れ必竟其の微細なればこそ
斯くの如き議論も起るなれ然るに蘇鐵并に
銀杏樹の精靈の單にも云ふ如く甚だ大なる
が故に其体の構造頗る明瞭にして核并に原
形質の兩者より成ること一點の疑ひなし隨
つて蘇鐵并に銀杏樹精靈の發見の右兩派の
說中正に後者の精靈なることを證せり加之
精靈の發見法は動物精靈と大同小異なり動
物精靈も植物精靈も其最も重要な運動器
官なる毛を生ずるに其体中一種生毛體と
名くる微細の小粒あり此粒の作用に因りて
毛を生ずり而して此生毛體の性質に就てい
る一派の學者の植物の精靈に於けると動物
の精靈に於けるとに因り全然異なるものと
爲せども余が當初より種々の理由に基き生
毛體なるもの動物植物を論ぜず全く同一の

ものと認めたるが余の此説に同意を表する
學者も少ならず殊に動物學者に多し而し
て余の近頃セニゴクと云ふ書に就き少しく
研究せるが其結果に因りて考ふるも余の説の
正確なること余が信じて疑はざる所なり
若し果して余が説にして當を得ば動物植物の
精靈の關係愈々親密なるものと考へらる
るなり人間や犬の如き動物にも精靈あり昔
や蘇鐵や公孫樹にも同様に精靈あり而
も此等の精靈が其構造并に發育相似たりと
云ふ普通の人も考へれば甚だ不思議な
るべしと雖も進化學上より見れば動物植物の
同一源より出たるものなれば其生殖上最
も重要な雄原素たる精靈が種々の點に於
て相類似せることと毫も怪むに足らざるの
みならず頗る興味ある事實なり
平瀬氏と余との精靈發見の事實が獨逸の學
術雜誌に出るや歐米の學者の大抵余等の發
見の正確なることを疑はざりしも中に疑
を懐くものあり例へば獨逸國ミュンヘン大
學教授ゲイベル先生の如き斯學の大家な
れども余等の發見を疑ひ本邦在留の知人に
宛てたる親書に余等の見出したるもの
精靈に非ずして何れ寄生物を誤解せるに非

ずや杯とありたり併し乍ら余等の見たるこ
との固より誤に非ず又三十一年に余等詳
細なる論文をも公にしたれば今日に至り
てゲイベル先生初め余等の發見に疑ひを
懐くもの一人も無く植物學教科書等に於て
も蘇鐵の生殖器官の部へ余等の説に基きて記
載し隨て此部も六七年前と違ひ稍や完全な
るに至りしれ余が勞空りざりしを證する
者にして余が私に愉快に感ずる所なり
尙ほ茲に話し度い余等の精靈發見の報一た
び出づるや米國農務省農事試驗場にウエバ
なる技師あり余等の發見を頗る面白く感
じ其年の夏に至り同國フロリダに處する蘇
鐵名ザミアに就きて研究を開始し後れば
せなから此ザミアに於ても同く精靈を發見
せり斯く東西同一様の發見ありて余等の發
見の正確なること愈々明になりたれば余
ハウエバー氏に對し其勞を謝せざるを得ず
ウエバー氏尙ほ其研究を繼續し一昨年の
末に其研究の詳細なるものを公にしたる
終りに隨て言ひ度い本邦に今日も尙ほ
純正學術を學びて更に實用なすと囑ける
ものあり實に惘然の至なり人生の目的

に實用に非ず吾人を圍繞する森羅萬象の秘
を發く吾人人間の義務なり併し乍ら此等
純正學術上の研究と雖も後に實用上多
大の効益を生ずること從來の例に照して考
ふれば敢て疑ふべからず右ウエバー氏の論
文の如き米國農務省農事試驗場の報告と
して出版せられたり純正學術が後に實用
上の効益を生ずることを知らざる人に右
の如き學術上の論文が農事試驗場の報告と
して出でたることを怪むるべし然れども
怪む勿れ是れ米人が頭腦明晰にして實用と
學術との關係を知るが爲なることを試驗場
部長ウエバー氏右論文に序して曰く植物の品
質を改良し收穫を増加せしむるに必ずや
植物遺傳の理に基かざるべからず而して遺
傳の理の植物生殖の細密なる研究に因りて以
て初めて明かなるべし因りて此ザミアの研究
も當場の報告として出版せりと卓見と云ふ
べし萬朝報記者が余の此純正學術上の發
見研究の大要を農工界欄内に收むるも蓋し
茲に見る所ありたるが爲ならん

圖覽

明治三十六年
十二月中浣起
筆
春城山人